啻に地球上の物體が地球に牽引せらるゝのみならず、總て宇宙間に在る物體は距離の如何に拘はらず、互に引き合ふもの即ち互に引力の作用を及ぼすものとせられ、二つの物體間の引力は其質量の相乘積に正比例し、其間の距離の自乘に逆比例すとせらるゝものなり。此引力を萬有引力といふ。物質の分子につきて言へば各分子は其近隣に在る他の分子に引力の作用を及ぼすのとせられ、此引力は分子力と言はる。凝集力と言ひ、附着力と言ふものも分子力即ち引力の内に屬す。金石の容易に碎けざるは凝集力に依る。棒を水中に入れて引出すとき水の之に附着するは着附力に依るなり。而して斯く總ての物質に引力あるは其極限分子に引力あるが爲めなるべくして引力が質量即ち極限分子の數（量）の相乘積に正比例する關係は各極限分子に一定の引力ありと見るべきが爲めなるべし。而して或物質の引力の總和は其物質を組成する極限分子の引力の總和たるものなるべし。

地球の引力と地球上に在る物質の重力との關係につきて述べたるが如くにして甲乙二物質間の引力の作用は甲につきて言へば甲が乙に牽引せられ若しくは甲が乙の方に進み行くことにして、乙につきて言へば乙が甲に牽引せられ若しくは乙が甲の方に進み行くことなり。

今精神作用につきて考ふるに例へば人は己が愛好するものに遠ざからんことを望むに非ずして之に近づかんと欲す。己が好める彫刻品あれば之に近づき行きて之を見んと欲す。己が好めるものにして己に所屬のものに非ざれば事情許さば之を己が所有とせんと欲す。是れ對象の爲めに己が心を引かれ之に近づかんとし若しくは之を近づけんとするなり。美しき景色、繪畫等に接して之を見るを喜ぶは之に心を引かるゝなり、牽引せらるゝなり。人の愛好するものにして懷抱するに堪ふるものは人之を懷抱せんとするの傾向あり。小兒が人形を懷抱し、成長者が愛好する小兒を

愛好のために懷抱する如きことあるは勿論、無機物を愛好するが爲めに之を手に取り或は將に嘗めんとし、或は將に懷抱せんとするが如きことあるものなり。

斯くの如くにして物質相互間の引力の作用と精神作用若しくは精神作用の爲めに起る身體の作用との間には大に類似するところあり。物質間の引力の作用も殆ど愛の作用、情の作用、意志の作用とも言ふべく、而して斯かる作用あるは知るところあるが爲めと見るべくして斯かる作用には又知の作用ありとも言ふべきものには非ざるかと感ぜらるゝの點あり。物質間引力の作用は恐らく精神作用と解し得べき關係のものなるべし。

而して機械的方面より見れば有機物例へば人に於ける精神作用も機械的に行はるるの觀あり。即ち感覺、知覺の如きは機械的に行はるゝの觀あり。聯想は機械的に行はるゝの觀あり。情的作用は知的作用によりて機械的に定めらるゝの觀あり。意

的作用は情的作用によりて機械的に定めらるゝの觀あり。外觀上斯くの如くなるのみならず、因果的、必然的、機械的關係より言へば有機物の精神作用も事實上、因果律、必然的機械的法則に支配せられ、一定の生理的狀態の人は一定の刺戟に對しては一定の感覺、知覺を起さゞるを得ず、一定の知的意識に對しては一定の情的作用の起らざるを得ざる等、因果的、必然的、機械的のものにして此機械的關係、受動的事情を他の方面より意識すれば自我の作用、自由意志の作用、能動、自動、自律的作用とも意識せられ、感ぜらるゝものなるべし。果して然りとせば其因果的、必然的、機械的關係あることは無機物に於けると同類にて此必然的關係を特殊特殊の場合につきて詳細に知ることが如何に困難なればとて之を機械的關係のものならずとは素より言ふを得ざるものなり。

精神作用には程度あり。人類中にありても精神發達の程度に差異あり。野蠻人と

文明人とは精神の發達同じからず。同時代同國内の人に在りても總ての人の精神は一様に發達するものに非ず。同一人の一日中に於ける精神的活動の程度に在りても時間によりて同一ならざるものあり。疲勞せる場合は然らざる場合よりも精神作用敏活ならざるなり。人類以外の動物は大體上人類よりも精神發達の程度低し。植物の精神作用は大體上動物のよりも程度低し。かく精神の發達、精神作用の發現には程度の差あり、而して無機物にも、精神あり、精神作用行はるゝものにして其有機物のと異なるは程度上のことのみと見るべきものなるべし。然れども無機物のに於けるが如く程度の下りたる精神作用は又之を單に機械的作用とも見るを得べく、且つ其關係を知るにも有機物のに關してよりも困難の度低きものにして無機物の作用は之を機械的、必然的のものとして取扱ひ易きものなるべし。而して無機物に於て精神的作用と物質的變化とが平行的に見らるべきこと有機物の場合に同じかるべ

し。

斯くの如くにして物質即ち無機物に於ける引力（即ち物質、無機物を組成する極限分子の引力の和）の如き作用は一面に於ては機械的作用と見るべく、他面に於ては精神的作用と見るを得べく、斯くの如き作用は機械的作用にして精神的作用、精神的作用にして機械的作用なりと見るべきものなるべし。從つて無機物の各極限分子には精神作用の主たる自我ありとも又自我なしとも見るべきものなるべし。即ち物質、無機物の極限分子には自我非自我の契合點あるものなるべく、物質の極限分子は無機物たると同時に有機物たるものなるべし。而して物質の極限分子の自我は非自識的自我にして其精神作用は無意識的作用なるべし。而して斯くの如き精神作用にして機械的作用たるものは準精神（的）作用とも言ひて可なるべし。

物理學説に曰く、「種々の實驗上の事實に徵するに物質の分子は米を袋につめたる

が如く、互に密接するものに非ずして、其間に間隙を有するものゝ如し。

又物質の各分子は其近隣にある他の分子に引力の作用を及ぼすものなり、云々。

物質の分子は此の如く互に引力を及ぼすものなれども其遂に密着せざるは分子が常に激しく振動するによる。固體の分子は振動の區域甚だ小にして且、其の近隣にある諸分子の作用を受くること甚だ大なり。液體にありては分子力は固體の場合よりも著しく弱く、容易に相互の位置を變ずることを得。氣體にありては分子間の距離甚だ大にして殆ど分子の作用を免れ、自由の運動を爲して、絶えず他の分子と衝突反躍するものなり。」(本多博士、田中學士合著新式物理學教科書。)此推測、假說は恐らく事實に適合せる正しきものならん。

然れども斯く分子間に間隙あることは吾人之を目にて見るを得ず、手にて觸れて感ずるを得ざるが如く感覺、知覺によりて直接に意識するを得ざるものにて、吾人

の感覺、知覺するところによれば物體の分子は互に密接するものなり。然らば斯く密接するものとして意識する吾人の感覺、知覺は誤れるもの錯覺、誤謬意識、誤謬斷定となさゞる可らざるか。

吾人蟲眼鏡を用ひて吾人の手を見るに其見ゆること肉眼にて見るよりも大にして且つ精密なり。蟲眼鏡よりも遙に大きく物體を吾人に見えしむる眼鏡を用ふれば吾人の手は吾人に見ゆること蟲眼鏡に依るよりも遙に大にして且つ精密なるべし。斯くの如くにして吾人の視力よりも或程度以上に大きく物體等を見る視力を有するものありて吾人の手、鐵其他の物體を見れば物體の分子は互に密接せず、其間に間隙あり、分子は振動することを直接に意識し得べきものなるべし。吾人若し之と等しく物體等を吾人に見えしむる眼鏡を使用して物體を見ることありとせば其見ゆることと右の如き視力を有するものが見る場合に等しかるべし。而して物體等の大きく見

ゆる程度倘益々進むに從ひ物體の分子は次第に大きく見え、分子間の間隙は次第に遠く見え、分子の振動の幅は次第に大きく見ゆるべし。斯くの如くにして無限の程度まで進めば分子は無限に大きく見え、分子間の距離は無限に大なるものと見え、分子振動の幅は無限に大なるものと見ゆべし。此程度次第に小となれば見ゆる物體の大きさ、分子の大きさ、分子間の距離（間隙）の大きさ等も次第に小となり、程度いよいよ小となりて各分子は別々に辯別せられず、分子間の間隙は消滅し、分子の振動は意識せられざるやうなり、而して吾人の有する知き視力を用ひて是等を見れば正に吾人に見ゆるが如く見ゆるものなり。

然らば物體等を大きく若しくは小さく見る視力の種々の程度の内、如何なる程度の視力によりて見らるゝ如き物體の狀態、其分子の狀態、分子間の間隙の狀態等を眞なる狀態と解すべきかといふに、是れには遂に一定の標準を立て難きものなるべし。

即ち物體は大小につきて言へば大きくも見え、小さくも見え得べき（方面を有する）もの、吾人に感覺せられ知覺せらるゝ如き方面をも有するものにして、斯く吾人に意識せらるゝ方面、狀態を意識する吾人は之を意識する能力を有するもの、斯かる狀態、方面に於て物體を意識し得ざるものは斯かる狀態、方面を意識するの能力を有せざるものなり。

同一人に在りても視力強き時期には分明に辨別し得られたる細字が、蜆力衰へて後には漠然とは見らるれども、何の字なるか明識せられざることあるべし。かくの如くにして或數の分子より成立せる物體の全部の大きさを同一に見、若しくは殆ど同一に見る如き場合に於ても其各分子の間に間隙あり、各分子は振動しつゝあることを直接に辨別し得る意識者と辨別し得ざる意識者との間の意識の差異も想像し得べきものなるが此場合に於ても一方の意識のみが有効なるに非ざること右、見ゆる

大小等につきて言へるところに同じ。

斯くて一面に於ては吾人の感覺力、知覺力なる直覺力によりて直接に（若しくは之に準じて間接に）認識せらるゝ時は物體の分子は互に密着し、分子の振動もなきものとせられ得べく、他面に於ては分子は互に密着せるものに非ずして絶えず振動をなせるものともせられ得べきものなるべし。斯くて或距離より見ては富士山は（分子間に間隙あり、分子が振動しつゝある等の狀態ならざる、）吾人に見ゆるが如き美なる形狀をも呈するものにして、蝴蝶の羽に堆積せる塵埃は（分子間に間隙あり、分子が振動しつゝある等の狀態ならざる、）吾人に見ゆるが如き美なる色彩、紋樣をも呈するものと解し得べきものなるべし。他は之に準ず。

而して分子が斯く絶えず振動することは極限分子の準精神作用（精神作用ともいふを得）によるものと解し得べきものなるべく、分子の斯かる振動に對應して極限分

精神作用が同時伴生をなすものなるべし。吾人が物質の熱とし、光、色とするものは空間的に之を見れば微粒の振動なること既記の如くなるべくして極限分子の準精神作用が之に平行することも右の如くなるべし。熱、光、色、引力の如きの場合のみならず、總て物質の運動あるところには極限分子の準精神作用あるものなるべし。運動のみならず、總て物質的變化は極限分子の準精神作用を伴ふものなるべし。

而して極限分子の準精神作用に於て必然的の方面と自由的の方面と契合することあるの點は人の精神作用と類を同じうすべきが結合せる此兩方面の割合は極限分子と人の如きとに於て等しからざるべし。自由の程度の增加（必然の程度の減少）と精神的能力の減少と正比例するものなるべく、かくて物質の極限分子の準精神作用に於ては自由なる程度極めて低く、自由ありて自由なきものといふべきものなるべし。又極

限分子の準精神作用は知情意等に分化せるものに非ざるべけれども、知的方面あるが如く、情的方面あるが如く、意的方面あるが如く觀察せらるゝこと既記の如く、而して意的方面よりして言へば極限分子の運動は該分子（たる物質を身體とせる自我）の意志作用によるもの、見得べきものなるべし。

されど極限分子の集合して所謂無機物を成せるもの例へば一箇の石（即ち或極限分子の和）の如きに於ては之を身體とせる自我なく、從つて其自我の精神作用の行はるゝことなかるべし。一箇の土塊、一箇の瓦、一滴の水、一の家、一の山等に於ても之に同じかるべく、地球、月、太陽の如きも、それぞれ一箇の自我の身體たるものには非ざるべし。かくの如くにして自我非自我の契合の點を有する物質の極限分子の一箇一箇は事情次第にては集りて人の身體、人以外の動物の身體、植物の物質的部分にして其自我の身體とも言はれ得べきもの、一般に有機物即ち生物の身體

ともなり、又事情次第にては集まりて自我なき無機物の體ともなるものなるべし。即ち有機物（生物）にては其集合體に對する自我あり又其自我の精神作用の行はるゝものにして無機物（無生物）にては斯くの如き自我なく、斯くの如き精神作用なきものなるべし。

かく無機物と有機物とは其種類を異にするところあるものにして地球の引力、分子引力の作用、發射されたる彈丸が飛行する作用、其他無機物の作用は極限分子の作用の集合と見るべきものなるべし。かくて極限分子の精神作用ある點より見れば地球の如きにも精神作用ありと言ふべく、又既記の如く、地球に對するの自我即ち地球靈魂とも言ふべきものなく、又其自我の精神作用なきものなるべけれども強いて言はんと欲すれば地球を構成せる極限分子の總ての自我の總和を地球の自我と言ふを得ざるに非ず、從つて此自我の精神作用も思惟し得られざるに非ず。されど斯

くの如き自我は一人一人に對する一個一個の自我の如きには非ずして集合的自我なりと言ひ得べきものなり。

國家は意志を決定し又之を表示す。國家は事業を經營し、又時ありて兵を動かす。故に國家は精神作用及物質的作用を營むものといふを得べし。然れども一個人に對する一の自我の如き自我が國家に對して存在し、而して例へば國家の意志を決定し若しくは之を實行するものに非ずして國家の意志は人によりて決定せられ、人によりて實行せらる。即ち一の國家に對する一の自我の存在するに非ざること地球の如きに同じ。郡、縣、町、村若しくは會社の如きに於ても關係之に準ず。されど國家、會社の如きに於ても精神作用及物質作用の行はるゝものなるが故に國家、會社の如き體制にも物心的現象ありとも言ひ得べし。又斯かる體制に（於ける）一種の自我ありと見得べきこと右地球の場合を例としても推知せらるゝなり。

上來說けるが如くにして物質的作用（變化）の行はるゝ時には普通の精神作用若しくは極限分子に於ける精神作用が必、同時伴生をなし、精神作用、準精神作用の行はるゝ時には物質作用が必、同時伴生をなすものなるべきが故に現象界に於ては精神作用と物質作用とは普遍的に平行するものなるべし。

同時伴生以外にも物心的現像あり。例へば身體を動かさんとの意志を起して身體が動くが如き場合には意志と身體の運動なる物質的現象とは同時伴生とは言ふ可らざらん。されど斯かる場合も物心的現象なり。

〔2〕 靈間內に於ける非精神的事項と物質的事項との結合せる現象。

音は物體の振動と同時伴生し、熱、光、色は物體の微粒の振動と同時伴生するものなること既に記せるところの如し。其他香、味等靈間内に於ける非精神的現象も空間的物質的現象と同時伴生のものなるべし。かくの如くにして現象界、此世に於ては物質的現象と同時伴生のものに非ざる靈間的事項なく、靈間的現象と同時伴生のものに非ざる物質的現象なく、靈間的事項、空間的事項として論ずるは此同時伴生の、平行せる、結合せる事項を別々に取扱ふに過ぎざるものなり。

發音せんと欲し（意志）て發音する場合には意志と音との結合せるものあり。此結合は靈間的事項相互間の結合なり。然れども斯かる場合には又聲帶の振動の如き空間的現象の結合せるものあるが故に斯かる場合も靈間的事項と空間的事項との結合せる事項（現象）中に屬するものなり。

二、價値的現象。

情意による價値上の斷定、審判、審判的斷定、（認識）あることは既に記せり。嚴密に言へば情意的審判は情的審判なることは既に記せり。善惡に關する審判あり、利害に關する審判あり、美醜に關する審判あることは既に記せり。かくて審判に對應する正邪、善惡、利害、美醜の如き價値的事項あるものなり。以下是等價値的事項につきて少しく論ずるところあるべし。

（一）善惡。

1、善惡の斷定は事實。　善惡の斷定あることは事實なり。啻に善惡の斷定あることが事實なるのみならず、善惡の標準の立てらるること、善惡につきての學たる倫

理學の講ぜらるゝ如きことも事實なり。

2、動機、意志。　甲なる人生計を立てんが爲めに即ち生計を立てんとの考にて勞働すとせよ。然る時は甲の此勞働の目的は生計を立つることなり。(斯くの如き目的は人生の目的、人生の究意的目的、人の究意的目的などいふものとは自ら異るものなること勿論なり。)而して甲をして此勞働をなすに至らしめたる觀念は生計を立つることの觀念なり。此觀念が甲の心を動かし甲をして勞働せんとの意志を決定せしめたるものなり。かくて右生計を立つることの觀念は勞働せんとの意志(勞働するの意志)に對して動機と言はる。普通、動機と稱せらるゝものは之に準ず。然らば右の場合には勞働せんとの意志の外には意志は有らざるか。曰く、有り。

「占有權は自己の爲めにする意思を以て物を所持するに因りて之を取得す」(民法の條文)の「物を所持する」は行爲にて此行爲には「物を所持する」ことの意志あり。

此意志は右勞働せんとの意志に對應す。然れども「自己の爲めにする意思」(意志)は「物を所持する」の意志其物とは別物なる意志なり。「自己の爲めにする「考」、自己の爲めにする「目的」」なり。「讓受人又は其代理人が現に占有物を所持する場合に於ては占有權の讓渡は當事者の意思表示のみに依りて之を爲すことを得」(民法の條文)及「代理人が自己の占有物を爾後本人の爲めに占有すべき意思を表示したるときは本人は之に因りて占有權を取得す」(民法の條文)の如きに於ても右と同じ關係にて、意思表示の表示其物に對しても表示せんとの意志あるものなれども、表示せんとの意志、考は「意思表示」、「意思を表示」の「意思」とは混同す可らず。「己の爲めにする意思」、「意思表示のみに依りて」及「意思を表示したるときは」の「意思」は右甲の場合に於て生計を立てんとの考に對應するものなり。かくて甲に於ては生計を立てんとの考、生計を立てんとの意志(意

思）を有するものと言ふべきなり。而して斯くの如き意志は、既記の如く、又之を目的とも言ひ得べきものなり。甲なる人は生計を立つる（こと）の目的にて勞働をなすなり。而して甲が勞働せんとの意志を有するは勞働せんとの目的をも有するものなり。勞働を實行するは此目的を達するものなり。右法文の場合等に於ても甲の場合に準ず。而して右勞働せんとの意志、目的の如きは志向、若しくは企圖、手段など言はるゝものゝ内に屬す。此例の如き志向は手段的目的、從屬的目的。手段的意志、從屬的意志にして生計を立てんとの目的、意志の如きが主要目的、主要意志たるものなり。

甲が生計を立てんが爲めに勞働するに於ては生計を立つることの觀念なる動機は甲をして勞働せんとの（手段的）意志、目的を決定せしむるのみならず、生計を立てんとの（主要）意志、目的を決定せしむるものなり。然れども此動機は此主要目的

を直接に決定せしむるものに非ずして間接に之を決定せしむるものなり。何故に然か言ふか。生計を立つることの觀念に對して先づ感情作用生起す、右の場合にては快感生起す。此感情、快感は此生計を立つることに對する方面に於てはそれにつきて價値を判定するもの、價値ありと判定するものなり。而して此感情の下す價値ありとの審判、即ち快感が生計を立つるの意志を決定せしむるものなり。かくて意志を直接に決定せしむるものは感情、純粹感情にして觀念其物には非ざるなり。故に意志を決定せしむるものを動機と言はゞ意志を決定せしむる快感は直接動機にして意志を決定せしむる觀念は間接動機なりといふべし。

不快感の場合即ち或事物に對して之を價値なしと審判する場合又は快の異同、不快の異同を比較する場合即ち價値の高下を比較審判する場合も之に準ずるものなり。

意志を動かすものを動機と言へば目的の觀念となるの觀念若しくは感情ならずとも動機と言はれ得るものなり。例へば身體の虛弱なるが故に人に輕視せられたるを遺憾とし熱心に自己の體育を勵み終に强壯の身體となるが如きことありとせよ。然る時は其輕視せられたることが體育を勵みし動機なりといふことを得べし。而して動機の語は通俗上、斯くの如き意味に於ても使用せらるゝものなり。

審判の自由、必然につきては既に記するところありしが右の例にて言へば生計を立つることの觀念に對して受動的に、機械的に必然的に價値の審判即ち感情、快感が生起するの點あれども他の方面より見れば此感情、審判は自我の感情、自我の審判、自我が能動的に自由に下すの審判なり。而して意志につきて言へば自我が快感を覺ゆる對象を獲得すること例へば生計を立つること(を獲得すること)が意志、自我の意志となるものなり。即ち意志は自我が喜ぶ通り、滿足する通りに自我により

て決定せらるゝものなり、意志は自我が感情によりて自ら自由に下す審判に從ひて自我が決定するもの、自由に決定するものなり。燃燒中の家の中に飛りて人を救出すが如き場合に於ては其作爲者は飛入るの前に於て手の舞ひ足の踏むところを知らずと言ふが如き快感を覺ゆるものに非ずと雖も飛入りて救出すことを喜ぶところありて之を實行せんと決意するもの、自由に決意するものなり。故に斯かる點より見れば意志は自由なるものなり。而して自我が斯く自由に決定する意志は事實上、自由なるものとして直接に感ぜられ、意識せらるゝ場合少からざるものなり。

かくの如くにして意志には受動的、必然的に動機によりて定めらるゝ方面即ち自由ならずと見らるべき方面あると共に自我が自由に決定するの自由なる方面ありて、意志には必然と自由との契合せるところあるものなり。

3、善惡の階段。　感情即ち快感不快感が對象の價値を判定するもの、換言すれば

自我が、感情によりて對象の價値を判定するものにして快感を惹起する行動(行爲)は善なる行動とせられ、不快感を惹起する行動は惡なる行動とせらるゝものなるべし。玆に甲なる聾啞者あり、聾啞者としては身體上精神上普通の發達をなし居れども(發音機關によりて)言語を發するを得ず、又善惡の字を解せずとせよ。然らば甲には善惡の辨別なきものなるか、彼は善惡上の斷定、審判を下さざるものなるか。曰く、否。彼は彼相應に善惡の判定をなすものなるべく、行動に對しては善なる行動、惡なる行動と判定するところあるものなるべし。然れども此判定は善惡といふ言語によるに非ず、彼の感ずる快、不快なる純粹感情によるものなるべし。甲の聾啞者以外の人に於ても純粹感情によりて善惡の判斷をなすこと甲に準ずるものなるべし。

然らば善惡審判の對象には如何なる種類あるか。右にも言へるが如くにして行動

(行爲)は善惡の審判を下さる。意志も善惡的審判を下さる。動機にも善とせらるゝものあり、又惡とせらるゝものあり。かくて目的即ち實踐上の個々の場合の目的にも善惡の區別あり。人生究竟の目的即ち理想(究竟的理想)として意識せらるゝ(描かるゝ)ものには其目的全部が惡と見らるべき場合はなかるべけんも描かるゝ目的次第にては、之を描く人よりも一層高き善惡判別力を有する人より見ては其內容中に惡と審判せらるべき分子をも包含することあり得べきなり。品性も良品性、善良なる品性、不良品性など言はる。自我、人も善惡審判の對象となる。善人、惡人、仁者、忠臣、孝子、義士、志士、義人、慈父、慈母など言ふは人の善惡を表示するものなり。

而して善につきて言へば、(惡の場合も善の場合に準ず)、快感を惹起する道德上の事項、即ち善なりとせらるゝものには其善とせらるゝ範圍甚だ狹くして或特殊の人

々若しくは特殊の個人にのみ善とせらるゝことあり、其範圍之よりも廣くして或社會の人々の如きにのみ善とせらるゝことあり、又其範圍の大に廣きものあるべし。又善には程度あり、高き程度の善、低き程度の善あり。以下斯くの如きことに關して記するところあるべし。

良心と稱せらるゝものあり。良心は道德心なり、善惡を判別、審判し、善に就き惡を避くるの心なり。かく良心といふものを思惟し得べきものなれども自我の一の心以外に良心あるに非ず、一の心に於て道德的作用をなすの方面が良心なり。自我の一の心には活動（作用）の諸方面あり。而して斯く作用の諸方面あるは一の心に能力の諸方面ありとも、諸方面の能力ありとも、又諸種の能力ありとも言ひ得べきものなるが故に良心は自我の（一の）心の道德的方面の作用をなすもの、道德的能力なり、自我の道德的能力なりといふを得べきなり。斯くの如き關係に於て良心は道

德心なり、自我の道德心なり。

良心の作用につきて三方面を說かる。知的方面の作用、情的方面の作用及意的方面の作用是なり。自己（自我）若しくは他人が將さに爲さんとするの行動につきて善惡を審判し、其既に爲したる行動につきて善惡を審判し、自己が善き行爲をなしては自ら喜び、惡しき行爲をなしては(自ら)後悔する如きは良心の審判的方面の作用なり。良心の滿足、良心の呵責など言はるゝは良心の此方面の作用なり。此滿足、呵責は自我が自ら快（喜び）、不快（苦痛）を感ずることなり。(自己の快感に基づき即ち善なりとして爲したる行動に對し不快を感じ即ち此行動を惡なりと審判することは往々にしてあるところなり。)良心の斯かる審判作用は其情の方面の作用なり。善惡の審判をなすに當りて知的作用の必要なること論を俟たず。例へば某なる人の某なる行爲が事實上如何なる狀態、如何なる關係のものなるかを辨別するは知的作

用なり。然れども斯くの如き辨別は特に良心の知的作用と見るの要なきが如し。されど想像によりて善の理想、道德の理想を描くが如きは良心の知的作用と言ひて可なるべく、又云々の事は善なり、云々のことは惡なりなど（知的に）知り、（斯く知るは自己が下す善惡の審判其他なる經驗に基づくものなり）、若しくは斯かることを豫め知るところあり、道德的事項（善惡的事項）を之に照して是は善なり惡なりなど機械的、知的に斷定、審判するが如きは良心の知的作用といふことを得ん。而して善を實行するが如きは良心の意的方面、意的作用なり。即ち良心は知情意三方面の能力、作用を包含するものと解し得べきなり。

人の心は總ての人に於て同一樣の狀態を呈するものに非ず。一日中に於ける同一人の心の狀態にも變化あり。發達上より言へば心の發達は總ての人に於て同樣なるものに非ず。人により時代により其他の事情により心の良心なる方面に於て種々

異同あるものなり。かくて良心は之を二種類に區分し、一を理想的良心若しくは完全良心と言ひ、他を現實的良心若しくは不完全良心と言ふことを得ん。完全良心は無限の高き程度に發達せる良心、不完全良心は無限に高き程度にまでは發達せざる良心なり。此世の人（將來の人にても）が實際に有する良心は無限に發達せるものとは見るを得ず。故に右の如く現實的良心を不完全良心と言ひて可なるべきなり。完全なる良心は斯く實際上、有し難きが如きものなれども吾人は良心の理想的狀態、完全なる狀態をも想像せざるを得ざるなり。故に完全なる良心、理想的良心とは言へるなり。

而して良心の發達若しくは事情（境遇）上、嚴密に同一樣なる良心は無きものと見ざる可らざるものなれども種類上より言ふ時は良心發達の程度、良心の存在する事情即ち境遇に於て同一のものあり、而して斯かる同一のものにも範圍の廣き即ち

同種類のものゝ多き場合あり、又範圍の狹き場合ありと言ふべきなるべし。而して斯く發達、事情（發達の狀態も事情の內に屬せしむるを得）の同種類なる良心は同一の道德的事項若しくは同種類の道德的事項に對しては、種類上より見て同一の善惡的審判を下すものと解すべきものなるべし。例へば或狀態の良心を有する人々は奴隷制度を惡しからずとし或狀態の良心を有する人々は之を惡しとするなり。但し良心發達の程度頗る相異なる人々の間に於ても同一事項、同一種類の事項に對して同一（種類）の善惡的審判を下すことあり。例へば故なくして自己若しくは他人に危害を及ぼすの行爲を惡行爲と審判し、勇ましき行動を善行動と審判するが如し。されど斯くの如き同一審判の場合に於ても良心の事情に同種類のものあり、良心の狀態に同一種類の方面あるものと見るを得べきなり。而して發達の狀態をも事情の內に數ふれば異種類の事情の下に在る良心は同一の善惡的事項に對して相互異な

れる善惡的審判を下すものなるべし。かくて發達上其他良心の事情の異同により同一若しくは同種類の道德的事項に對して良心の下す善惡的審判に異同あるものなるべし。

善惡は良心によりて審判せらるゝものなるが故に良心が善惡の標準なりといふべし。故に發達の狀態其他同種類の事情の下に在る良心は善惡標準上、同一種類の標準なり。甲の國の一の時代に於ては善惡の時代標準とも言ふべき標準、思潮あり、他の時代に於ては該時代の時代標準とも言ふべきものある如きは右の如き關係によるものなるべし。甲の國の或時代に善惡上、著しき時代標準とも言ふべきものゝ之なきが如きは國內の人々の良心間、事情の統一の著しきものなきによるべし。但し同社會同時代の人々に於ける善惡標準の全然不統一なる如きことは有り得べきものに非ざるべし。乙の國、丙丁の社會等に於ける善惡の標準も之に準ず。

斯く善惡審判の能力ある良心が善惡の標準、善惡審判の標準と見らるべきなるが、良心が自ら、即ち善惡の標準たる自己によりて善惡を審判することは良心が善惡の標準によりて（善惡の標準に從ひて）善惡を審判するものとも言ふを得べきなり。

良心の發達に程度の異同あるものなるが故に善惡の標準の程度にも高下ありとせざる可らず。例へば人と獸類とを鬪爭せしめ娯樂的に之を見物するが如きことは或程度以上に良心の發達せる人に於ては忍びざるところなるべきが、其忍びざるの良心に於ては忍ぶの良心に於てよりも（其點に於て）善惡標準の程度高きものと見るべきなるべし。以下の例に於ても關係之に同じかるべし。農夫が食用植物に肥料を施せるを見、而して自己の食するものも斯くの如きものなることを聞き其眞を告げし人に切腹を命ずるが如きことは今日の文明國若しくはそれ以上の文明國に於ては行はれざるべし。人格を尊重することを善とし之を尊重せざることを惡とする審判

の如きは開化の進むに從ひ益々行はるゝに至るべし。夫は妻を呼捨てにし妻は夫に對して敬語を使用せざる可らざる如き男女間に於ける差別的慣習は漸次改まり行くものなるべし。外國人なるが故にとて野蠻人と見、自國人よりも下等の人と解するが如きことは精神の或方面が或程度以上に發達せる人に於ては良心の許さゞるところなるべし。

而して一般に文明の進歩と言はるゝものは善惡標準の進歩をも包含するものにして人の有する善惡標準も漸次變遷し進化するところあるものなるべし。即ち文明の程度の低き社會に於ては善惡標準の程度も低くして文明の程度の高き社會は其高き丈、善惡標準の程度も高きところあるものなるべし。

斯く善惡の標準に高下あり、進歩ある等のことあれども人心若しくは良心は畢竟同種類のものにして其進歩（發達、進化）も類似（同種類）及差異の法則に支配せ

らるゝものなるべきが故に、社會、時代の差別に從ひて善惡標準上相違あると共に其間一致の點の存するものなるべし。

人、壓迫によりて意志を決行せしめられ、行動せしめらるると言はるゝ場合あり。斯くの如き場合の行動（意志することも行動中に包含せしむるを得）は行動者の自由選擇に出でざるものとも見るを得。「抗拒す可からざる强制に遇ひ其意に非ざるの所爲は其罪を論ぜず」（刑法）、「本屬長官の命令に從ひ其職務を以て爲したる者は其罪を論ぜず」（刑法）などの規定あるも所以ありと謂ふべし。然れども人の如何なる行動もそが意識的に爲さるる以上は自由意志に出でたるものと見得べき點あり。何故ぞや。自己が知りて爲したることは自己が然か爲さんとの意志を定めて爲したるものなり。其意志を定むるに當りて如何なる壓迫の存在せるありとするも實際上行動するに至る事項を意識するところあり、感情（一種の快感）之に伴ひて起り、意

志は此感情によりて定められたるもの即ち自己が自己の感情によりて自己の意志を定めたるものにして自己の欲するところのことを爲せしものなり。なるほど實際行動せしことにつきては不快を感ぜし點、大に不快を感ぜし點もあり、又或は實際行動せしよりも以外のことを爲したしとの欲望も發生せしなるべし。かく發生せし諸種の欲望、諸種の不快の事項中につき行動者は比較的關係上其場合に於て自己のより欲せしこと、最も快感を覺えし對象を選擇し意志を決定して行動せしものなり。欲望、感情に競爭なかりしとすれば行動者は比較選擇せずして、苦し乍らも自己の望みし對象を實現せしものなり。而して此場合に於ても自己の爲したる行動に對しては道德上責任を負はざる可らざるものあるなり。但し壓迫上、惡しき行動をなしたりとせば其際の善惡の標準は程度の高きものに非ずして其低きものなり。行動者は低き程度の標準は從ひて行動したるものなり。行動者、換言すれば

行動者の良心は低き程度の善惡標準（善の標準）に從はざるを得ざりしなり。凡そ如何なる意志にも自由なる方面と必然なる方面との存すること既に記せしところの如し。壓迫によりて意志を決定せしめらるゝ場合は其必然的方面が著しく感ぜらるゝものにして斯くの如き場合の意志、行動は非自由の境遇に於ける自由意志、自由行動など言ひ得べきところあるなり。該行動にして惡しきものとせば此非自由の境遇、壓迫の下に立てることが行動者に關して情狀酌量の餘地ある所以なり。

善に高下の別あり。程度の低き善惡標準に適合する善は高き善惡標準に適合するものよりも其程度低し。是れ其標準が善惡上の時代標準、一國習俗上の善惡標準、個人に於ける善惡標準の如きの孰れたるとに論なきなり。例へば印度に於て見るが如き難行苦行者に於て難行苦行を爲すことが善なり。隱者間に於ては隱遁すること

が善なり。炮烙の刑、磔刑の如きを實行せし社會に於ては斯くの如き行動を惡とせざりしなり。難行苦行を惡とせず却りて之を善とすると之を惡とするとの間、炮烙の刑、磔刑の如きを惡とせざると之を惡とするとの間の如きには善惡の標準に程度の高低あり、善の程度に高下あり、善に大小あるなり。惡につきて言へば善に準じて惡に大小の區別あるなり。然らば善惡標準の如何なる低き程度まで其標準は適用せらるゝものなるかといふに、是には制限あることなく、如何に程度の低き善惡標準によりても善惡的事項の善惡は審判せられ得るものにて或善惡標準に依る人に對しては其善の標準に適合するものは善にして其惡の標準に適合するものは惡と言はざるを得ざるなり。即ち純粹情感上、人に快を惹起する善惡的事項は然か惹起せしめらるゝ人に對しては善にして、不快を惹起する行爲は然か惹起せしめらるゝ人に對しては惡なり。良心につきて言へば如何なる善惡にても感情によりて良心が之

を然か審判するものにして而して良心が善なりと審判する方にのみ意志は決定せらるゝものなり。かくて良心の眠れる場合、良心の痲痺せる場合など言はるゝは良心が低き程度の善惡標準に從ふ場合なり。

かく善惡は善惡標準に適合するものなれども良心次第にて善惡標準に高下あるが故に、高き善惡標準に照せば低き程度の善は惡なる場合あるものなり。既記の難行苦行、炮烙の刑の執行の如きは今日の文明國の善惡標準に照せば惡なる行爲なり。他は之に準ず。

かく善あり、惡あり、善惡の標準に高きあり低きあり、善に大小あり、良心に低き程度に發達せるものあり高き程度に發達せるものあり、良心には發達の可能性ある等のことあるが故に、良心は發達せしむべく、高き程度の善を知り高き程度の善惡標準を知れる人に就きて學ぶべく、道は聞くべく學ぶべきなり。

4、善の理想。　良心は善の理想を描く。善の理想は之を絶對的理想と相對的理想とに區分することを得べし。善の絶對的理想或は究竟的理想は無限の善、至高善（最高善）、究竟善、善の極致なり。人生の理想、人生究竟の理想、道德的理想などいふも此究竟的理想、善の極致なり。良心の發達の狀態次第にては究竟的理想を描かざるを得ざるなり。精神發達の或狀態の人は相對的事項のみにて滿足するを得ず、善に關しても相對的の善にて滿足するを得ざるなり。究竟的善は空漠として殆ど名狀す可らざる狀態に於て意識せらるゝことあるべし。又そが稍形容し得べき狀態にて意識せらるゝこともあるべし。自我の完全圓滿なる發達の狀態を道德的理想、究竟善とするが如きは後者の例なり。而して斯く空漠的に想像せらるゝ善の極致、やゝ形容得べき狀態に於て意識せらるゝ究竟的理想に無限の妙味あり、人をして惝怳せしめ、恍惚たらしむるの魅力あるものなり。善の相對的理想は又善の現實的理想、

比較的理想、實現的理想、有限的理想など言ひ得べきものにして事實上實現せらるゝもの若しくは實現し得らると思はるゝもの、有限的に高き善、有限的に大に高き善なり。例へば某學校の施設を一定の程度まで增進せしむるの理想、百萬圓を所有して五拾萬圓を公共事業に投ずるの理想の如きは相對的理想なり。而して斯くの如きの理想は到達し得らるゝことあるものなり。善の理想中には到達せらるゝに從ひ更に一歩を進みて一層高き理想となり、漸次向上し行くものあり。斯くの如き性質の理想は相對的理想の方面と究竟的理想の方面とを併せ有するものといふべし。例へば國利民福を增進するの理想、自我の能力を發展するの理想等の如し。幾干にても國利民福を增進するを得ば是れ國利民福を增進するの理想に到達し得たりともいふべし。然れども國利民福を次第に增進するも尙未だ理想に到達せざるものともいふを得べし。既に到達せるよりも一層高き程度の國利民福の想像し得らるゝもの

あればなり。かくて如何ほど國利民福を增進するも尙未だ理想に到達せずと言はるべき點あるなり。自我の能力を發展するの理想に於ても之に同じ。かくの如き理想は進歩的性質の理想なり。到達せらるゝに從つて次第に進歩し行くものなればなり。

人には品性あり。品性は行爲（行動）の習慣性なり、同種類（類似）の行動を反覆するの傾向なり、同種類の行動を反覆する（人の）性質なり。良心の發達の程度低き人は低き善惡標準に從ひての行動を反覆し、良心の發達の程度高きものは高き善惡標準に從ひての行動を反覆す。但し一の良心にてあり乍ら或種類の行動に於ては高き標準に從ひ、他の種類の行動に於ては低き標準に依るが如きことあり。大體上、品性の劣れる人とは思はれざるに竊盜の性癖ある人あり。かくの如き人は竊盜の行爲に於ては低き善惡標準に從ひ、他の行爲に於ては一層高き標準に從ふものなり。

強盜殺人罪を犯すが如き人に在りても己が子若しくは親に對し若しくは知人に對する所作の如きに於ては病的と見るべからざるものもあるべし。出來心にて罪を犯すなど言はるゝことあり。平素は相當の品位ある婦人にして出來心の爲め呉服物の如きを竊取することありといふ。出來心の行爲は習慣的のものには非ざるが、斯かる際の良心は平素よりも低き善惡標準に從ふものなり。又平素は穩健の說を唱へながら、或事情の爲めに平素の所說と相容れざることを固く執つて動かざるが如き人にありては善惡標準上前後其程度を同じうせざるものなり。右擧げたる例の如き人の(各自)の良心には不統一の點あるものなり。

良心が一層高き程度に發展する場合は其以前よりも高き善惡標準に從ふものなり。かゝる場合に於ても時間の前後上、良心に不統一の點はあれども發展の高き程度に上れる良心は以前の善惡標準に從つて行動するものに非ざるが故に、善惡の標

準が時には高くなり、時には低くなる不統一の狀態とは類を異にするものにして、進步し行く良心は不統一の狀態に在るものとは言はざる方穩當なるべし。品性頗る高尙なるが如き人にして墮落して下等なる品性の人となることあり。斯くの如き人に於ては良心が退步せるなり。良心が退步せる後は以前よりも低き善惡標準に從ひて行動するものなるが、斯かる良心にして時に一層高き善惡標準に從ふが如きことなければ其良心は(低き善惡標準に從ふことに於て)統一あるものといふべきなり。又理想として描く善惡の標準と實踐の場合に使用する善惡の標準との間には普通、高下の差異あるものなれども此場合も良心の作用の不統一とは言はずして可なるべし。但し實行し得べき善の知と實行と相伴はざる即ち知行不合一の場合の如きは良心の不統一と見るべきなるべし。言行不一致の場合も大體上之に準すべきものならんが、惡と知りつゝ善と言ひ、善と思ひつゝ惡と言ふが如き場合も無きを保し難き

が故に言行不一致（言行不合一）と知行不合一とは全然同一視すべきものには非ざるべし。

良心の理想とするところは諸種の行動の善惡標準が高き程度のものたるに在りとも言ふを得べし。高き程度の標準といふことには良心が退歩し又は一時的に程度の低き狀態に下り行きて低き程度の標準に從ふことなきことをも包含するものなり。故に良心の理想を右の如きものとするは其善惡標準が高き程度のものにして而して時の前後上統一あるものたることを意味するものなり。而して高き程度の標準といふことには比較的の意味も絶對的の意味も包容せらるゝものなり。

理性の語は種々の意に使用せらるゝものなるが道德上より言ふ時は道德的理想、（善の理想）を描くの能力、高き善惡標準に從ひて統一ある行動をなすの能力など見らるゝものなり。又理性は命令（及禁止）をなすと言はる。右の如き意味の理性の

命令に從ひての行動、生活は高き程度の道德的行動、生活にして此理性の命令は高き程度に發達せる良心即ち高き階級の良心の命令なり。かくて道德的方面に於ては理性と高き階級の良心とは同一視し得べきところあるなり。かくて人生の目的は理性に從ふに在りとせられ、かく理性に從ひての生活を合理的生活、道德的生活などいふことあるなり。而して人生の目的とせらるゝ合理的生活即ち道德的生活は良心が理想とするものなり。

理性は感情と對立せしめらるゝことあり。然る場合の理性は知的能力中に屬するものといふべし。然れども右記の如く理性に命令、禁止する作用ありとする場合の命令、禁止は意的作用と解すべきに非ずして情的作用と解すべきものなるべし。此用語法に限らず理性の語は其意味の關係上自ら情的方面をも包含することあるものなり。

感情的の人、感情に左右せらるゝ人など言はるゝ場合の感情は純粋感情に非ずして不純粋感情、情緒なり。而して感情的の人、感情に左右せらるゝ人は理性的の人、高き階級の良心に從ひて統一的生活をなす人に非ずして行爲の方針、善惡の標準に不定なるの點、不統一の點あるの人なり。

良心(自我)の理想に高き善惡標準に從ひての行動(生活)を意味するものあることを述べたりしが、斯く高き善惡標準に從ひて行動する良心は其發達の程度高きものなり。かゝる良心を有(し之に從ひて行動)する人は品性の高き人、道德の高き人なり。而して品性の高き人及其低き人は又それぞれ人格の高き人、人格の低き人とも言はるゝことあるものなり。

究竟善、最高善、(善の)理想、人の進求すべき、(人の目的とすべき)善の究竟的狀態、又は人の目的とする究竟善の狀態は良心の描くところ、良心の好むところに

して自我(良心)が規定するものなり。即ち人の目的、自我の目的は自我、自我の良心が自由に規定するもの、命ずるものにして此方面より見る時は人の目的、道德の理想、道德律、人道(倫理)は自律的のものなり。

一方より見れば理想、人道は右の如く自律的のものなれども他方より見れば自己は自己が創造せしものに非ず、善惡審判能力、人の目的等を選定するの能力は自己が自ら創造せしものに非ずして賦與せられたるものなり。かくて人の目的、理想、人道は他に規定せられ、吾人は之を承認せしめらるゝもの、吾人は之を承認せざるを得ざるものにして、自律的のものに非ず、他律的のもの、必然的のもの、機械的のものなり。

即ち理想、人道には一方に於ては他律的の點あり、他方に於ては自律的の點あるなり。

上來記せるが如くにして人、人の自我、人の良心には行動、理想等善惡的事項に關し、自律、他律の兩方面あり、兩方面の契合するところあるものなるが故に善惡上の自律的の方面若しくは他律的の方面は其一方面にして其全方面、全部と見らるべきものに非ざるなり。

5、人格の尊嚴。　人の意識の統一を指して人格といふ場合あること及品位、品格と同じ意義に人格の語を使用する場合あることは既に說けり。人格は又尊嚴なるもの、尊重せらるべきものとせらるゝことあり。老若男女を問はず、賢なると愚なると、人爵の有ると無きとを論ぜず、如何なる人にも人の人たる資格なる人格あるが故に如何なる人に對しても敬意を表せざる可らずとするは人格尊嚴說なり。或程度以上に精神の發達せる人には左の如きことあるべし。彼等は自己の名譽を重んじ、故なくして他が自己の生命若しくは所有物を奪ふを好まず、精神上若しくは身體上の理由

なき束縛を嫌ひ其自由を喜ぶべし。彼等は己より推して他の人も然るべきことを斷定すべし。彼等は、人は人として皆同種類のものにして同等、平等なることを思惟すべし、かくて彼等は自己を敬重せんとことを欲し、又自已と同じく他の人を敬重せざる可らざることを感ずべし。かくて彼等の良心は自己及他人を尊敬することを善なりと審判すべし。即ち或程度以上に精神の發達せる人より見る時は如何なる人にも尊嚴の點あり、如何なる人も尊重せらるべき點あるものなるべし。自覺の程度未だ高からざる人は其程度上進するに從ひ自己に尊嚴なる點あることを意識するに至り、又之に伴ひて他の人にも尊嚴なる點あり、人は皆尊嚴なる點を有することを意識するに至るべし。法律思想の發達せる國に在りては人の生命、自由、名譽、財產の如きは尊重すべきものとせらる。而して將來、道德、法律の益々進歩するに從ひ人には人として他より尊敬せらるべき點ありとの思想は益々普及增進するものな

るべし。かくて人は（或程度以上に精神の發達せる人に對しては）尊嚴なる點を有するものとすべきものにして、此尊嚴なる點は從來の用語法に從ひ人の人たる資格、人格と言ひて可なるべく、而して人は人格を有するが故に尊重せられざる可らずと解し得べきものなるべし。

數理は之を了解せざるものに對しては存在せざるに同じ點あり。然れども精神の相當に發達する人は數理の正しきことを了解するを得。高等數理の如きに至りては之を了解する人の數は之を了解せざる人の數よりも遙に小なり。されど此事由を以て高等數理の眞なること、其存在することを否定するを得ず。盲目者は大陽を見ずと雖も太陽の存在し且つ赤色を呈し居ることは承認せざる可らず。日本に在りては紐育を目擊するを得ず。されど紐育は存在し、其存在の地に行けば之を目擊するを得るものなり。良心の或程度以上に發達せる人によりて了解、承認、認識せらる

欠

るところあるものなり。

但し、必要に迫られては右の如く、人の生命、自由、名譽、財産の類を制限し若しくは剝奪するが如きことなかるべからずと雖も、是れ人の理想とすべきものにあらず。而して理想とすべきものには人格の尊嚴を犯さんとするが如きことを包含せざるものなり。

6、正邪利害と善惡。　法則に適合する行爲を正、之に反するものを邪とせらる。例へば裁判官が法律に適合せしめて罪を斷ずるは正なり。而して斯くの如き正は又善なり。法律を正しく適用するが如きことは良心の希望するところにして善の標準に適合するものなればなり。或法則に適合する行動が善惡の標準に照して惡なる場合ありとせよ、(斯かる場合はあり得べし。)然る時は同行動は、そが同法則に適合せるの點に於ては正なりといふべし、されど善惡の語の普通の用法上斯くの如き行動

欠

は善とせられずして惡とせらるゝものなり。邪の場合に於ても之に準ず。但し普通の場合としては法則に適合するの正は善にして法則に適合せざるの邪は惡なり。而して一般の用語法上、正は善にして邪は惡なるものなり。

人の理想即ち究竟的理想、人生の目的即ち究竟的目的に適合する行爲が善なる行爲にして、之に反するが惡なる行爲とせらるゝことあり。人の究竟的目的に適合する行爲は究竟的善行爲なり。斯くの如き行爲の善なることは論を俟たざるなり。然れども善は究竟善のみに限るものに非ず。もし究竟善のみを善とせば世遂に善、善行爲なしと言ふを得ん。相對善の標準、相對的理想に適合する行動も善なり、普通、善とせらるゝものなり。のみならず、世に普通、善行爲とせらるゝものは相對善の標準に適合する相對善なり。惡につきて言へば、人生の究竟的目的に適合するに非ざる行爲は惡なりとせば人の行爲は、悉く惡なりと言はざる可らざるに至る。即ち普

通の用語法に於けるが如く、相對的善の標準に適合せざるものも惡とせざる可らず。かくて究竟善は究竟善の標準に適合するもの、相對善は相對善の標準に適合するもの、惡は善の標準に適合せざるものにして而して是等標準は善惡判斷上の法則といふを得べきが故に善は又正にして惡は又邪なるものなり。

斯くの如くにして特殊の用語法の場合を除ける一般の場合に於ては正は善、善は正、邪は惡、惡は邪なるものなり。

善は少くも或點に於ては人、自我を利するものなり。善なりと審判せらるゝ事項は少くも然かく審判する人、自我、その心、その良心に快感を與ふるものにして、此點に於ては審判者は該事項より利益を享受するものなればなり。總じて快感を感ずる人は其感ずるの點に於ては利益を享受するものなり。又例へば君國の爲めに自己の生命を捨つるは善なる行爲なるが此善行の爲めに少くも行爲者は自己の品位、

名譽を揚げ、生れし甲斐ある人となるものにして其方面に於ては此行爲は利益を產出するものなり。而して善と言はるゝ方面は斯く利益ある方面にして損害ある方面には非ざるなり。君國の爲めに身を捨つる場合に、單に身を捨つるの點が善には非ずして君國に盡すの點が善なるもの、生ける甲斐あり、死せる甲斐あらしむるの點が善なるものなり。惡が人を害するものなる關係及品性、人が善もしくは惡なるの關係の如きも之に準ず。然れども例へば利益の方面ある行爲は總て善なりとは言ふべからず。他の金錢を盜む人は之を自已のものとするの點に於ては自已を利するものなれども、盜むは惡なり、惡行爲たるなり。但し斯くの如き場合に於ても行爲者は利益を生ずるよりも損害を生ずるの程度一層大なるものなり。惡行爲者を利せる金錢は同額に於て彼害者に損失を及ぼすのみならず、惡行爲者は其行爲の爲めに自已の品位、名譽を傷づけ、品性を損ふ等のことあるものなればなり。

又善惡的事項ならずして人に利害を及ぼすものあり。天災の爲めに人の害を被ること大なるあり。穀物の豐作は人に利を與ふ。而して天災、豐作の如きは道德上の善とも惡とも評すべからざるものなり。

かくて善惡と利害とは全然同一のものには非ざるが、利を得るの行爲にして善と兩立せざるものは低き善惡標準に從ふ行爲にして、それよりも高き標準に照せば惡なるものなり。右の例、他人の金錢を盜みて自已のものとなすことにつきて言へば單に行爲者が自已の所有を增加する丈の點、斯く增加して自已を利する丈の點、若しくは行爲者が自已の純粹、感情、良心に從ふといふ方面に於ては、惡には非ざれども行爲者の良心、善惡標準よりも高き善惡標準に照すことによりて（而して他人の所有物を盜むといふ方面に於て）惡となるものなり。

(二) 美醜。

1、情的審判と知的審判。　美醜的事項は大に善惡的事項に準ずるところあり。(醜は廣義の美の內に屬すとせらる。)美的斷定(美醜的斷定)が情意の作用、一層嚴密に言へば純粹感情の作用によりて下さるゝものなることは前に說けり。但し是れ美的審判の普通の場合にして其特殊の場合としては善惡的審判に於けるが如く知的作用による審判卽ち機械的審判あり。例へば挿花を見ては美的審判生起すべし。此場合に於ても純粹の快感若しくは不快感の發生する方面あるべく、其點に於ては審判は情的審判なれども已が知れる挿花の法則に適へりや否やの知的斷定によりても挿花なる成績の良否卽ち美否を判ずることあるべし。此後者なる審判は知的、機械的審判なり。(如何なるものが美なるものなりや、醜なるものなりやを知的に知るは自已

が下す美醜に關する審判等なる經驗に基づくものなり。挿花の〔美の〕法則とせらるゝものか如何なるものなるかの如きを〔知的に〕知ることが經驗に基づくことも之に同じ。)

2、審美的能力。　美的審判は素より自我が下すものにして自我は斯く審判するの能力を有するものなり。此能力は審美心、審美力、審美的能力、美意識力、美的能力なり。良心は行爲等の善惡を知り善惡を審判するの知、感情及善を實行するの意志を包含するものなるが、審美力には意志を包含するものに非ず。例へば美なる景色を賞翫すること(の觀念)、其賞翫を繼續すること(の觀念)に對して快感を覺ゆる點までは善なりと審判するものとも、美なりと審判するものとも言ふを得べきものなれども賞翫するの意志作用、賞翫を繼續するの意志作用は良心に屬するものなり。(意志が良心、良心の感情によりてのみ決定せらるゝことは前に言へり。)

3、美感は無利害的に非ず。　美的審判には利害關係の伴はざるものなるかといふに然らざるなり。例へは美なる繪畫を觀て之に心を奪はるとせよ。此際觀賞者の精神作用は中止せるに非ざるなり。彼は繪畫を觀つゝあるなり。他の萬事を忘れ、全心を傾けて之を觀つゝあるなり。即ち彼は非常に强き意志を以て之を觀つゝあるなり。其意志に抵抗するものなきが故に彼は自已の實現しつゝある意志作用を意識せずとも彼が繪畫を觀ることに注意力を用ひつゝあることは顯著なる事實なり。彼は繪畫を觀て快感を享受しつゝあり。大ある快感を享受しつゝあり。此快感は大なりと雖も身體を激動することなく、和平なる快感にして而して殆ど一重意識に近きの觀あり。然れども此快感は記憶せらるゝものなるが故に全然一重意識なるには非ずと雖も幾干か一重なる點もあるべし。而して此觀賞者が觀賞を繼續するものは彼の享受する快感が斯く繼續するの意志を發現せしむるによるなり。即ち觀賞者は快感の享

受を繼續せんとの目的を有するものなり。彼の快感享受は彼を利するものなり。彼が他の萬事を忘却するほど强烈なる熱心を以て繪畫を觀つゝあるは此利益を收めつゝあるものなり。彼は此快感の享受を手段として他の利益を得んと欲するには非ざれども此快感の享受なる利益を目的として之を追求しつゝあるなり。彼は目的に達する手段を追求せずして目的其物を直接に追求しつゝあるなり。彼は非常なる熱心を以て、全心を籠めて、之を追求しつゝあるなり。故に彼の此觀賞には利害心、利己心の關係あり、大に關係ありと言はざる可らざるなり。即ち美感は其享受者が之を享受するの際、彼に欲望、利害心、利己心、若しくは意志を喚起せざるものに非ず、却りて之を喚起するものなり。

4、美的審判の受動、能動。　例へば美なる山水に接すれば美感を覺ゆるが如く、或種類の狀態に在る精神が或狀態の事物、或内容の觀念に對すれば美(醜)的感情は

必然的に機械的に生起するものなるべし。此點より言へば美的審判(美醜に關する審判)は必然的、機械的、受動的、他律的のもの、因果の關係に支配せらるゝものなり。然れども他の方面より見る時は美的審判は自我の審美心、美的快感、美的不快感、自我が下す審判にして自由的、能動的、自律的のものなり。

5、美及美感の種類。美麗及壯美。　美は一分類として美麗と壯美とに二分せらるゝことあり。美麗は美の內、軟かなる種類のものにして壯美は寧ろ硬き種類の美なりといふべし。然れども二者の內孰れか一に屬すとは言ひ難く兩者を兼ねたる如き美あることは勿論なり。今少しく之を檢せん。知的情操を生起する對象は美なりと言ふを得んが、美麗壯美兩者間に於ける此美の位置は如何。道德上の理想の狀態は善なる狀態たるに相違なしと雖も又美なるの方面ありて美的快感を誘起す。宗教的情操の對象の如きにも美たるの方面あり。美の種類上、道德的理想の美、宗教的情操の

對象の美の如きの位置如何。幽玄の狀態には美の方面あり。幽玄美には頗る軟かなるの點あり、而して又頗る壯美的たるの點あり。かくて幽玄美は一見壯美とも言ひ難きが如くなれども壯美を廣義に解する時は幽玄美は壯美中に屬せしむるの穩當なるものあるべし。道德的理想の美は幽玄美中に屬せしむべし。宗教的對象なる美、古色蒼然たるの美、知的情操の對象たる美、幽邃なる谷等の美の如きも幽玄美の內に數ふべし。身を千億萬里の遠きに置きて世界、吾人を想望する場合の美感の美、其他一般に哲學的趣味の對象(たる美)、神秘的事項の美の如きも幽玄的のものと謂ふべし。故に是等の美は幽玄美として廣義の壯美中に包攝せらるゝものと見るべきなり。而して美麗は一歩を轉ずれば幽玄美となるものにして美麗と幽玄美とは境界を接するものなり。優美、溫雅、古雅の如きには美麗と幽玄との相交れるものあるなり。

美感即ち美が惹起する快感にも右の如き美の種類に對應するものあり。美麗なる對象に對して起る美感は美麗的快感なり。壯美に對して起る美感は壯美的快感なり。壯美の内の幽玄美に對して起る美感は幽玄的快感なり。

美は又之を二種類に區分して表面美及裏面美となすことを得べし。表面美は又表現美といふべく、表面に表現せる（狀態の）美なり。例へば山水、花、鳥、月、星、建築、彫刻、繪畫、音樂、詩の如きに於て夫等が呈する狀態、表現の狀態の美は表現美、表面美なり。（詩は韻文にても散文にても文の内に屬す。）總ての感覺及知覺は美（醜）的方面を有すと謂ふべし。色、光、音、香、味は勿論、觸覺、壓覺、溫覺、冷覺にも美的方面あり。適當の溫度の風呂の人に快感を惹起するものは美なる風呂なり。料理に於て料理の味若しくは外觀を美にする方法（なる方面）も一種の美術なり。かゝる色音香味等、物質の形狀大小等及び是等のものの配合の如きは物質的狀

態なるが故に是等狀態の美は物質美と稱して可なるべし。物質美即ち物質の呈せる、表現せる狀態の美は表現美なり。精神作用にも美的方面あり。困難なる問題を解釋せし爲め知的情操の起る場合に於て此解釋をなせし知的作用には美なる方面あり。美的感情其物にも美の方面あり。善をなす爲めの意志作用にも美なる方面あり。かくの如き美なる精神作用は之を直接に意識、審判する人（自己）に對しては表面美なり。而して知情意の如きの美は精神美なり。

吾人に直接に意識（審判）せらるゝ美を直接美と言ひ間接に審判せらるゝ美を間接美と言へば表面美には直接美あり、又間接美あり。例へば色彩、音、形狀、大小等の美は直接に意識せらるゝ場合多し。音樂に於て音響の連續の狀態は連續の短き範圍内に於ては直接に審判し得らるといふべきものなれども長きに亘る連續上の狀態は直接には意識し難くして直接意識のみならず想起をも必要とするものなり。文

に於ても之に同じ。又文に叙べられ若しくは繪に畫かれたる山水の實物其物の美の如きは、文、繪畫を見ては、直接に審判せらるゝに非ずして間接に意識、審判せらるゝものなり。

裏面美は表面に表現せる狀態の裏面に存する美なり。之に種々あり。美なる事物にせよ、醜なる事物にせよ、模倣物即ち作成品が被模倣物に類似する程度上、美に程度あり。類似の程度の最も高きものは眞に逼るものなり。此逼眞の美は類似美なり、模倣美なり。而して此種の美の美たる所以は其發現の表面的狀態其物の美なることに在らずして模倣物の表現的狀態と被模倣物との類似せること即ち類似上の關係（類似的關係）に在るなり。例へば葡萄の繪が實物なる葡萄に酷似せる時は此酷似を辨別する人は嘆賞を禁ずるを得ず即ち美感を覺ゆるものなるが此類似的關係上の美は表現的狀態其物の美に非ずして此繪より見る時は此繪の裏面に存するものな

り。されど此繪及實物なる葡萄を直接に見て兩者の間に類似の關係あることを意識する場合に於ては此類似的關係は兩者間に表現し居るものなり。故に然る場合の右酷似の美は表現美、表面美にして而して直接に意識せらるる直接美なり。今甲の人言語を發し、乙の人直ちに之に模倣して眞に逼る時は聞く人感心せざるを得ざるなり。此場合の模倣の美も表面美、直接美なり。右は類似美につきて言へるものなれども他の種類の裏面美に於ても表面美として見らるべきものあること類似美の場合に同じものなり。而して裏面美を有するものは之を有するが爲めに美なり、價値ありとせらるゝものなり。

人の身體には其裏面に品性の存在するものなり。品性には美なるものあり。而して品性は瞬時的事項に非ず、繼續的事項、總和的事項なり。故に品性の美は總和的事項の美、總和美なり。而して品性は身體の裏面に伏在するものなるが故に品性の美は

裏面美なり。文若しくは音樂等に於て部分より組成せられたる全部は勿論、部分にても、之を組成する、それよりも一層小なる部分あるときは、組成部分の總和なり。故に斯かる全部若しくは部分の美は總和美なり。而して音樂の音響のみの總和美は表面美なり。短き文の意法は作成者が作成する時に於ては直接に同人に意識せらるゝものなれども長き文の意味の詳細は作成者自身と雖も之を直接に意識するものに非ず、作成當時に於ては想起を交へて間接に、作成の時以外の時に於ては想起若しくは推理若しくは其兩作用によりて、全然間接に意識せらる。而して表現の點に於ては文の意味は作成者に對しては表現して表面的狀態を呈するものなれども作成者以外の人に對しては表面的狀態を呈することなきが爲め作成者以外の人が文の意味を意識するは推理によるものなり。かくて文の意味は特殊の場合の外は間接に意識せらるゝものにして從つて文の意味の美は特殊の場合の外は音響若しくは文字の

裏面に存して、間接に審判せらるゝ裏面美なり。風景の美は之に接して意識せらるゝ時は總和的表面美（表面的總和美）なり、文、繪畫、寫眞の如きを媒介とし推理によりて意識せらるゝ時は裏面美なり。

茲に彫刻あり、其表現の狀態が被模逼物の眞に逼るとせよ。其逼眞を意識する人は之を賞嘆すべし。而して此彫刻を目擊する人次第にては此逼眞美に對してより以外に、斯く眞に倣らしめたる彫刻家の技能に對して敬服せざるを得ざるべし。即ち斯かる目擊者によりて想像、推測せられたる彫刻家の技能は斯かる目擊者に美感を惹起す。即其技能は斯かる目擊者に對しては美なるものなり。而して此技能は彫刻に對して原因となれるものなり。故に此技能の美は彫刻の原因なるものゝ美にして斯かる美は原因美と稱して可なるべし。一般に美なる結果を生ずる原因なる能力は美なるもの、能力美を具有するものなり。表現的狀態中に天才の美（天才美）の閃

くものは人をして感に堪へざらしむるものあり。而して天才其物、天才其物の美は表現的狀態の裏面に存するものなり。優雅なる擧動をなすものは之に對する裏面の心的狀態に於ても優雅なるものあり。善は美なり、善行は美なる行なり。而して美なる善行爲をなすの人には其心に於ても善行爲に對應する心の美あるものなり。行爲には動機惡にして表面の行動美なるが如く見ゆるものもあるべし。されど斯くの如き場合に於ても（惡動機以外に）此美なる行動に表はるゝ心の美なる點あるものなり。而して精神美は該精神作用を營む人自身によりて直接に意識せらるゝ方面に於ては表面美にして、他の人に對しては裏面美、外部に表現せる行動に關して言へば原因美、而して精神的狀態が部分より成立せる總和なるの點に於ては總和美なり。自然の美即ち天工の美には、そが然かく表現する原因なくんばあらず。此表現せるもの美なるが故に此表現に對する原因も美なるものと見るを得べけん。世界は

少くも其部分に於て美なるものあるが故に、世界の裏面には美なる點、裏面美ありとせざる可らじ。夕映の美麗、幽玄、莊嚴なる狀態に接し敬虔の情の湧起する場合に於て其感情の對象は夕映と關係あるもの、夕映の原因といふべきものにして夕映に準じ高き程度に於て美なりとせらるゝものなり。即ち此對象は原因美なり。雄大なる景色に對して原因美の感ぜらるゝことあり。一片の花を見ても原因美の感ぜらるゝことあるものなり。總て結果の美なるは結果美といふを得べし。而して原因より推して結果の美ならんことを思惟することあり。一月場所前に於ける某力士の成績等に基づきて同場所に於ける同力士の角力の花々しく、美ならんことを推測するは結果美を推測するなり。事業を計畫するに當りては結果美を豫想するところあり。此世界を神の造れるものとし、神を全智全能至仁なるものとし、此世界の原因なる神が斯くの如きものなるが故に此世界は可能的世界中最良のもの（從つて最美

のもの）と推理する場合の此世界の美は神に對しては結果美なり。而して原因美と結果美とは總括して因果美と稱し得べけんが、結果美なる世界の美には表面美あり、又精神美に於ける裏面美などの如く裏面美あるものなり。

白耳義國ワーテルローの地は歴史上奈翁と關係あるより人此地名を聞きて感慨措く能はざる場合あるべし。かくてワーテルローは人の心を動かすの美なる點を有するものなるが、該地が有する此美は該地として表現せるものに非ずして該地と歴史的事項との關係に存する關係美なり。即ち歴史上の事項に人に美感を惹起する方面たる美なる方面あり、此美なる點がワーテルローをして右の如く美ならしむるものなり。故にワーテルローの此美は裏面美なり。而してワーテルローと歴史的事項上の美との關係は關係の種類中に於て第四種關係なるが故にワーテルローが有する右記の美は第四種關係上の美（第四種關係美）なり。偉人の作成品たるが故に美な

りとせらるゝ美も第四種關係美、裏面美なり。泉岳寺が赤穂四十七士の墓地なるが故に人の心を動かすなる美も第四種關係美なり。著名なる人の住家、所有品、遊戯せる地等が其人の故を以て尊重せらるゝも第四種關係美によるものなり。世には或事物の表面美を直接に鑑賞するの能力なくして第四種關係上より該事物を鍾愛、尊重するが如きもの甚だ多し。

偉人との關係ある故、歴史上の關係ある故に事物が有する美の類は歴史的事項上の美即ち歴史(的)美の内に屬するものと言ふことを得ん。(偉人も歴史的事項なり。)一休の書は其外觀即ち表現的狀態に於ても美なるものなるべし。然れども其外觀の美の有無は措いて問はずとも一休の書なりといふ點既に美なるべけんが此美は歴史美なり。世界に稀有なる品、日本に一二個のみ存在する物等には其少數なる點より美を生ずる場合あるものなるが此少數なることは歴史上の事項と見得べきが故に之

によりて生ずる美も歴史美の内に包含せしめ得べし。古物なるが故に、甚だ古き物なるが故に生ずる年代上の美も歴史美なり。眞の價値の有無に關せず價値あるものと世に定評あり或は世評あるものも是が爲めに美なる點を有するに至る。此定評、世評も歴史上の出來事なるが故に定評美、世評美も歴史美と言ひ得べし。但し世評美の如きは、其美なる價値を喪失することなきを保せざるものなり。

以上記せし四種の關係上の美は各一種のみ同一事物に存することに限らざることは例に出せるところを見ても知るを得べし。

美なるは（事物の）形式なりとの說、觀念、思想、內容なりとの說、感情なりとの說あり。此形式といふ語は廣義に用ひられ、觀念の表現（顯現）の狀態は總て形式と解せらるゝことあり。かくて此世界に生起、存在する總ての現象は形式とせられ物體の形狀、色、音、運動の如きも形式と稱せらるゝことあり。然れども人の觀

念、思想例へば文章の意味、音樂の文句の意味、彫刻に現はれたる裏面の精神の如きも形式と對立せしめらるることあるものにて形式の語は右の如く廣義にのみ使用せらるゝものには非ざるなり。現象的事項が盡く形式と見らるる場合に、之と對立する觀念、內容は絕對者、神の觀念など言はるゝものなり。されど觀念は外界即ち自然界、自然物に表現し、藝術品に表現し、人生に表現すなど言はるゝ場合の觀念中に於て絕對者の觀念など言ふべきものは寧ろ自然物に表現するものと解すべく、藝術品、人生に表現する觀念は人の觀念と解すべきものあり。而して形式にも美醜的關係あり、觀念、思想、意味、內容にも美醜的關係あり、美なる事物に對して生起する吾人の感情にも美醜的關係あり、此三者孰れにも美なるものあり、形式美あり、觀念（思想）美、意味の美、內容美あり、感情美、感覺美、知覺美等あるものなるが故に、美を以て右三種中の一種のみに限るものとはなす可らざるなり。

6、美の標準の階段。　美の標準に高下の階段あり、美に高下、階段あること善の場合に同じ。審美心、審美的能力の發達の程度高きものは美の(審判の)高き標準(を有するもの)なり。かくて高き程度に發達せる審美心(を有する人)は其低き審美心(を有する人)よりも美的審判の標準たる資格一層高く美的審判上の權威一層大なり。審美的天才は審美に關し非常に高き資格、非常に大なる權威を有す。かく高き資格ある人の好惡は一面に於ては主觀的、個人的色彩を有し乍ら他面に於ては客觀的、普遍的優劣の審判たるものなり。かくて美の審判には正しき審判と誤れる審判とあり、美の客觀的優劣に適應して下す美的審判は正しき審判即ち美の認識にして之に反するものは誤れる美的審判なり。而して程度の高き美的標準に適合する美は高き程度の美にして程度の低き美的標準に適合する美は低き程度の美なり。かくて美にも高下の階段あり、

美に於ても究竟的理想(理想美、究竟美、美の極致、絶對美)及相對的理想(相對美)あるものなるが究竟的理想の實現し難きこと善の場合に同じ。注意すべきは人の定めたる、煩瑣なる、齷齪たる美の法則と美の高き標準とを混同す可らざることなり。

7、美と善、眞。　總ての美は善には非ず。善は行爲、品性、人等善惡的事項、事物の善惡的方面につきて言はるゝものなるが要するに行爲に關係あるものなり。かくて天工の美は勿論、人の作成品にても美たるの點丈に於ては行爲に關係なきが故に、善惡上の審判を下し得べからざるものなり。然らば良心は美を發揮するの行動を如何に見るかといふに、良心は之を善とするものにて飽くまでも美を發揮することは良心の理想中に包含せらるるものなり。されど發達せる良心は善の全局に眼を注ぐものにして衣服、裝飾等に心を奪はれて生活の困難に陷るをも顧みざるが如きは斯かる良心の許さゞるところなり。而して美の方面より言へば生活上不自由なきことは

美にして困窮に苦しむことは美には非ず。かくて良心が困窮を避けんとするは又そが美を發揮せんと勉むるものとも見るを得べし。即ち良心は一方面に於て美にして他方面に於て醜なるを望まず、孰れの方面に於ても美を得るの行爲をなさんとするものなり。然れども孰れの方面に於ても無限の滿足を得ることは不可能なるが故に發達せる良心は有限の範圍内に於て諸種の狀態中其最も滿足するものを選擇するものなり。

善は總て美なれども善とは言ふを得ざる美ありて、美は善を其内に包含し、又、正、利を其内に包含するが故に、總ての價値的審判は殆ど美的審判と見ることを得べし。（善、美等と分化せざる審判あることにつきては直ちに述ぶるところあるべし。）かくて（道德上の）良心にも審美心中に屬する點あり。良心の情的審判は審美心の作用とも言ふを得べきなり。

眞は美とせらるゝことあり、然らざることあり。敵の城砦の陷落は當方の爲めには美にして先方即ち敵に取りては醜なり。甲の友乙が落馬して重傷を負へることの噂を甲が聞く場合には此噂が事實に適合し即ち眞なることは甲の美とするところに非ずして其虛報ならんことが甲の美とするところなり。かくて眞必して美ならず、僞必して美ならざるに非ざる場合ありと雖も單に眞僞的方面のみより見る時の關係上、人には眞を喜び僞を嫌ふの性質あるが故に此關係にては眞は美にして僞は醜なるものなり。

（三）非分化的審判。

人類よりも以下の動物は知、情、意の作用を區別して意識することなかるべく、眞、善、美等と區別して意識することなかるべし。若し斯く區別して意識すとせば、

そは頗る低き程度のものなるべし。人に在りても精神作用を意識する場合には常に知情意等區別して意識するものに非ず、其區別して意識するは少數の場合なるべし。美、善、眞に關して意識するに於ても之に同じかるべし。例へば前方より自轉車に乘れる人の進み來るを見て之を避くる場合に於て之を避くるは實際上害を避け利を求むるものなれども「自轉車來れり、斯くすれば害を避け利を受くるを得」などいふが如き思惟の起る場合は事實上殆ど之なく、又之を避くるは善をなすものなれども「之を避くるの行爲は善なり」などいふが如き意識の起る場合は事實上殆どなかるべし。美なるものを見て己を忘るゝが如き場合に於ても「今見つゝある對象は美なり」などいふ思考の起らざるが多かるべし。されど斯く對象に對して利害、正邪、善惡、美醜等價値内に於ける分化的判斷を下すことなき場合に於ても快不快に基づきての價値上の判斷は對象に對して必、起るものなるべし。かくの如き判斷は價値上

の非分化的判斷、非分化的審判なり。理想につきて言へば例へば究竟善の意識には美、眞等と區別し得べき善の特色の存する場合もあり得べけれども、自我の圓滿に發達せる狀態などいふが如く、意識の内容が簡單となるに從ひ、次第に善なる特色を失ひて單に美なる狀態のものとなり、又美なる特色をも失ひて單に價値の最も大なる狀態、價値の甚だ大なる狀態の意識となるべし。正、利、眞等の價値的事項につきても之に同じかるべし。是れ分化的價値が意識上非分化的のものとなれるものなり。而して斯く非分化的に價値を審判する能力は良心又は審美心など言ふよりは寧ろ單に審判力、價値的審判力など言ふべきものなるべし。

貳、現象の理由。

現象の理由につきては便宜上、本體界に關する章下に於て說くべし。

第二、本體界。

一、外圍。

事物を二分して一を現象界とし他を本體界とすることは世に行はるゝものなるが、抑も本體、世界の本體、本體界は如何なるところに在るものなるか。本體(世界の本體をも包含す)は時間内に存在し而して時間内にのみ存在するものなるか。時間は其内に(時間内の)前後の存在、同時存在、繼續を許すものゝみ。然れども世界の本體には現象として發現し得べき可能性あり、而して可能性は時間内にのみ存在するものに非ず。故に世界の本體の如きには時間以外の存在を容認せざる可らず。世界の本體の如きは空間内に存在するものなるか。空間内に存在するものは立體的のもの(物質の極限分子の如きは無限に小にして、有無共通的のものなれども尚、無

限に小なる立體たる方面を有す)ならざる可らず、換言すれば物質ならざる可らず。然れども此世界、此世界の總ての事物の根源たり、理由たり、原因たる如き世界の本體は之を(空間内に存在する)物質とは見る可らざるなり。

世に靈魂不滅の説あり。靈魂不滅なりとせば靈魂は如何なるところに存在するものなるか。靈魂は時間内に存在すとするも時間内にのみ存在するもの即ち時間内の前後に繼續するのみのものにては之なかるべきが故に、靈魂には時間以外に存在する方面なかる可らず。靈魂が空間内に存在すとせば空間的の如何なる延長を有するものにして又空間内の如何なるところに存在するものなるか。

在天の靈といふ。その天はいづこなるか。

事物を容るゝものに靈間あることは既に説けり。精神作用、法則、性質、自我の如きが時間内に存在すると共に靈間内に存在するものなることは既に説けり。而し

て現象世界、此世には共根柢あり、原因ありとせざる可らずして、其根柢、原因なる本體即ち世界の本體は空間内に存在せずして靈間内に存するものなるべし。即ち現象界の空間、靈間に準じ世界の本體の如きを包含する本體界の外圍に靈間ありとすべきものなるべし。本體界より見る時は本體界に外圍ありとすべきものなりや否やは現象界に在りて斷言し難きことなれども現象界の吾人より見る時は、右の如く、本體界には靈間なる外圍ありとなすを妨げざるべし。然らば本體界には空間あり、時間ありとすべきか。

現象界の空間、時間は精神現象以外のものなれども空間時間の觀念及空間的狀態、時間的狀態の觀念は精神作用、意識の内容となり得るものなり。かくの如くなるが故に假令本體界に(現象界に於けるが如く)外圍としては空間時間なしとするも空間時間に準ずる事項あり得べからずとは斷言するを得ざるなり。否、現象界よりして

見る時は本體界も時間内に存在するもの、時間内に於て前後に存續するものとなすべきなるべし。空間は之を本體界の外圍とは言ふ可らざるべきも、現象界の或内容を包容する空間として現出し得べき素質は本體界に存在するものと見るべきなるべし。若し斯かる素質もなしとせば空間として現象界に事實たることなかるべければなり。時間靈間に於ても時間靈間として現象界に現出し得べき關係が本體界に存在するものと言はざる可らざるなり。但し此素質、關係といへるは右空間時間に準ずるものと言へるとは別種の事項なり。

とにかく現象界の吾人より見る時は本體界の外圍に靈間と時間と有りといふを得べけん。

二、内容。

（一）世界の本體

現象界、此世、此世界に對して、そが顯現するの根源たる世界の本體は種々の名を以て呼ばる。實在、世界の實在、絶對者、梵、梵天、眞如、實相、神、上帝、天、大我、太極、理、理性、道等是なり。但し是等の語は同一の意味にのみ使用せらるゝものに非ず、又現象界の根柢をのみ意味するに非ざることあるものなり。然らば此世界の本體、此世界の根源は如何なる狀態のものなるか。現象として開展することが事實なる以上は世界の本體は然かく開展するの可能性即ち能力を有するものと解せざる可らず。例へば人に於けるが如く、此世に知情意として開展することが事實なる以上は世界の本體には然かく開展するの可能性、能力、素質ありと解せざる可らず。現象界に進化ある以上は世界の本體には之に對する可能性なかる可らず。

此世に優美、幽玄、嵩高、莊嚴なる事項等ある以上は此世の根柢、裏面には然るべき可能性なかる可らず。人が種々の製作をなし、發見、發明をなし、人の利福を增し、世の進歩を高め、高尚なる人格の人となり、偉大なる人物となる等、人の所有する能力、可能性の大なるものあるを首肯せしむ。然れども人は遂に物質の一片をも創造するを得ざるなり。而して世界の本體には此世の總ての事項の現象する根柢あり。故に人の如きに比較して言ふ時は世界の本體には無限の可能性、能力あり、世界の本體は全能なりと解するを得べし。一個の輕業師の所作を見よ、人をして靈妙の感に打たれしむるものあり。人は善を發揮せしめ、美を上進せしめ、眞を獲得して止まず、理想を描きて恍惚たり、人生に義烈あり、忠勇あり、仁愛あり。斯くの如きもの靈妙ならざらんや。爛たる夜の星を眺觀せよ、美ならざるが如き花にても之を熟視せよ、靈妙なる發現とせざるを得るか。觀察し去り。玩味し來る、世界

の根柢は人より見る時は無限に靈妙なるもの、世界の本體には無限に靈妙なる可能性、能力ありと言ふを得べけんなり。かくて現象界の根本原因につきて言へば此原因、原因物は無限に能力あり、無限に靈妙なるべきなり。

然らば世界の本體は物質的のものなるか、精神的のものなるかと言ふに、靈間內存在物たる世界の本體は物質的のもの、空間的延長あるものとは言ひ難かるべし。然らばそは精神的のものなるかといふに、然りとも遽に斷ず可らず。されど世界の本體は物質、物質的事項としても開展し、精神的事項としても開展し得べきものなるが故に、そは然かく開展、現象し得べき素質、可能性を有するものとは言ひ得べきなり。

(二) 本體的自我

人の通俗的自我即ち人には肉體あり、究竟的自我あり、而して究竟的自我は靈間的存在物なること概說の如くなるが、通俗的自我に於ても他の現象に於けるが如く靈間的事項と空間的事項と相互對應し、同時伴生するものにして、人の一個の身體全部に對應しては究竟的自我あり、神精作用に對應しては神經中樞に於ける物質的現象あり、而して神經中樞に於ける物質的現象が中樞以外に物質的、空間的に影響するところには之に對應して靈間的現象の發現するものなるべし。而して人死するも身體は死體として空間內に存在するものなるが、身體と同時伴生、並存せし究竟的自我は人の死後、如何に成り行くものなるか。究竟的自我は人の絕命と共に絕滅するものなるが。現象界の存在物としては身體と究竟的自我と聊も存在を前後にすることなく、又瞬時にても一方のみ存じて他方の滅亡せしことはなかりしなるべきに、人の死後、空間的存在の身體のみ空間內に存續して靈間的存在の自我は靈間內に存

續することなきものなるか。たとひ左樣のことあればとて、そが事實ならば、然かあるべき理由の存するものにて決して不合理のものとは言ふを得ざれども、恐らくは人の死亡せる後、空間的存在物たりし身體の尙存續する如く、靈間的存在物たりし究竟的自我も尙、靈間內に存續するものにては非ざるか。

空間的事項を主として見ればこそ靈間的事項は之に對して從たるものなるが如くにも見ゆれ、互に對應し、同時伴生並存をなす空間的事項と靈間的事項との間には主從的若しくは輕重的關係はなきものなるべし。是れ靈間的事項なる自我、精神作用、準精神作用、非精神的作用の孰れと空間的事項たる物質的現象との間に於ても同じ關係のものなるべし。否、生物、殊に人に於ては自我即ち究竟的自我は身體を自己の所有とせるものと見るべき點あるほどにて究竟的自我が主にて身體は從たるの關係ありとさへ解すべきものなり。されど現象界に於ては空間的事項と靈間的事

項とは對等に取扱ひ得べき方面あり、空間的事項は靈間的事項の反面、裏面、符號、而して靈間的事項は空間的事項の反面、裏面、符號にして兩者の內一方あれば他方あり、後者あれば前者あるものなるべし。而して人死し身體と究竟的自我との並存終りを告げて身體のみ空間內に殘存するは是れ究竟的自我が身體と分離して究竟的自我のみ靈間內に殘存することの徵證、符號ならざるを保す可らず。否、其徵證、符號と見得べきものあるべし。然れども身體と究竟的自我と分離せる後は兩者とも獨立の存在を保持するものなるべし。故に分離後に於て身體が分解するも之を以て究竟的自我が絕滅するの證とはなすを得ざるべし。而して肉體より獨立せる自我は斯く獨立すると同じく肉體、神經の現象より獨立せる精神作用を營まざるを必とす可からず、否、之を營むものなるべし。

斯く肉體より獨立せる自我及其精神作用は現象界のものなるが、本體界のものな

るかといふに現象界、此世に於ては靈間的事項と空間的事項とは各々他の同時伴生を必要とすと見るべきものなるべきに、肉體より獨立せる自我と其精神作用とには斯かる同時伴生なきが故に是等は現象界の事項に非ずして本體界の事項として取扱ふべきものなるべし。即ち同種の究竟的自我及其營む精神作用にてあり乍ら物質的(空間的)現象と同時伴生たる場合に於ては現象界に屬し、物質的現象より獨立せる場合に於ては本體界に屬するものなるべし。かくて現象界内に屬せし(究竟的)自我の存在及作用は本體界に亘りて繼續するものなるべし。

現象界に於ける究竟的自我は斯く本體界に亘りて存續するものならんが斯かる自我の如きも之に對する根源ありと見るを得べく、其根源は現象界の根源と同一のものなるべし。而して斯かる自我も本體界に存在して本體と稱し得べきものなるが故に本體界の内容たる事項(本體)は大別して二となすことを得べけん。究竟的事項

即ち世界の根抵たる事項(世界の本體、究竟的本體)及派生的事項是なり。派生的事項とは右言へる自我及其作用の如きをいふ。是等は世界の根抵(たる事項)其物には非ずして、それより分出せるもの、派生せるものと見るべければなり。此派生的事項中には派生的本體とそれ以外のものとを區別し得べし。右本體界の自我の如きは派生的本體なれども其自我の作用の如きは本體とは言ひ難かるべければなり。本體界に於ける右の如き自我は本體的自我と稱して可なるべし。本體界に於ける派生的事項は又本體界に於ける現象など言ひ得べし。

然らば本體的自我は消滅することなきものなりや否や。是れ斷言し難きことなり。然れども恐らくは本體的自我は不滅のものなるべし。本體界の存在物即ち本體には死亡といふことなかるべし。而して靈間は頗る空間に類するところあるものなれども靈間内の存在物は立體的延長を有せざること現象界の究竟的自我及精神作用の如

きものにして空間的に考察すれば幾何學上の點の如きものなるが故に如何に多くの本體的自我の如きが存在することあるも何等恐慌を來すべき事情の生起することなかるべきなり。本體的自我にして不滅ならば自我（現象界の究竟的自我）は不滅なるべきなり。故に此世の（究竟的）自我は此世に死（消滅）し彼の世、即ち本體界に於て再生すといふべく、自我が此世にて死（消滅）することは彼世にて生ることなりと言ふべきなり。

果して右の如く究竟的自我が不滅なりとせば、而して此自我を靈魂と稱すれば靈魂は不滅なり。而して死者の自我即ち肉體を離れたる自我なる靈（靈魂）、死者の靈は本體界の靈間内に存在するものなるべきが故に本體界、靈間を天と稱すれば死者の靈は天に在りといふべきなり。

（三）理由。

例へば歩まんとの意志を起して歩むは現象なり。此現象の理由は右意志なりといふべし。而して此意志は法則其物に非ずして一の具體的事項なり。故に此場合の如きものに於ては現象の理由は法則ならざるものなり。世に進化あり。進化は何によりて生起するものなるか。進化の法則によりてなり。即ち世界に於ける進化の理由は進化の法則なり。斜に投上げられたる石は總て弓形の途を辿りて地上に落つ。何故に斯くの如き現象生起するか。是れ然るべき法則あるによるなり。即ち石の右の如き現象ある理由は法則なり。此世の事物間に類似の點あり、差異の點あり、因果の關係あり、第四種關係ある如きも皆然るべき理由、法則あるによりてなり。かくて現象の理由たる法則には數多の種類あり。物理的變化上の法則、化學的變化上の

法則、倫理上の法則、宗教上の法則等皆現象の理由たる法則といふべし。物質上の法則にても、精神上の法則にても、自然的法則にても、人爲的法則にても、他律上の法則、自律上の法則にても、矛盾せる事項間に調和あり、有無間に契合あるの法則にても、事實的法則、價値的法則、規範的法則、心然的法則、自由的法則にても現象を支配する以上は現象の理由たるなり。現象の理由には現象世界の全部に關するものあり、其局部に關するものあり。現象界の事項は物質的事項のみに非ず、又精神的事項のみに非ざるが故に其物質的事項上の理由は現象世界の局部の理由にして其精神的事項上の理由も現象世界の局部の理由なり。現象世界は全部として進化の法則に支配せらるゝものならんが故に此法則は世界の全部に關するの理由なり。此世界が美なるものにても美たらざるものにても現象世界全部をして然らしむる理由は現象世界の全部に對する理由なり。現象世界の顯現に對する理由は現象世界全部

に對する理由なり。

理由には現象的事項に關するものゝみならず本體的事項に關するものあり。本體界は既に記せるが如くにして無差別平等的狀態たるに非ずして本體界に於ても世界の本體より派生せる事項ありとすべきなり。かかる派生的事項が本體界に存在するには又之に對應する理由あるべきなり。

而して是等現象界に關する理由及本體的事項に關する理由は皆世界の本體內に在りと言ふべく又世界の本體より發すといふべきものにして而して是等理由は空間的存在に非ずして靈間的存在なり。

三、世界觀、人生觀。

(一) 世界、人生の價値。

善、美などゝ價値的事項の分化せざるものに對しても之を審判するの能力即ち審判力に高下の階段（程度）あること、分化せるものに對する場合に準ずべし。而して高き程度に於ける審判力は高き程度の審判的標準によるものにして其低き程度に於ける審判力は低き程度の標準によるものなり。

世界、人生に關し之を望ましきものとする說と望ましからざるものとする說とあり。是れ即ち價値に關する世界觀、人生觀なり。而して世界、人生を望ましからずとする說は厭世觀など言はれ、世界、人生を望ましとする說は樂天觀など言はる。されど世、人生を樂しむ（樂しく思ふ、望ましく思ふ）を、厭世の語に準じて樂世と言ひ、世、人生を望ましきものとする說を樂世觀と言ひ、本體的自我の存在する本體界、靈間を天と言ひて、死後、天に於ける存在を樂しむ、望ましく思ふを天を樂しむなどゝ言へば頗る便宜なるが如く思はるゝが故に本書に於ては以下此用語法を

採用せんとす。

人は暑しとて苦を感じ、寒しとて苦を感ず。風呂の湯熱ければ不快を覺え、ぬるければ又不快を覺ゆ。喫する食物にも口に適せざるものあり。「三度たく飯さへこはし軟かし、心のまゝにならぬ世の中」なり。人は有限物にて人の能力には限界あるも苦の種となるべし。外物に蔽はるゝことを知りても不快の感なき能はず。晴天を欲して雨天を迎ふること少からず。熱心作業中、使用せる電燈の突如として滅することあり。驕るを得るかと喜べば久しからず。盛者必衰。會者常離。好事魔多し。歡樂極つて悲哀生ず。風邪に罹らざるもの幾人。齒痛殆ど堪ふべからず。父母我に先立ちて死するか、我父母に先立つか。平素は速しとも思へる瀛車が吾人急用あるの時に當りて何ぞ遲き。折角の目的も畵餅に歸すること少しとせず。富者には富者の憂あり、貧者には貧者の憂あり。人生豈に苦なからんや。或は發狂するものあり。

或は厭世自殺するものあり。地震あり、海嘯あり、暴風あり、落雷あり、洪水あり、火災あり、饑饉あり、餓死するものあり。人生の禍數ふるに遑あらざらんとす。竊盜、强盜、放火、殺人、絶ゆる時なし。何の爲めの監獄ぞ。何故の死刑ぞ。世には罪惡も多きかな。學べば學ぶほど疑の生ずるあり、知れば知るほど不可解の感を深うす。世界、宇宙間の全事物に對すれば人智遂に無なりと謂ふべし。

右、記するところ、實に世界の暗黑面の一端のみ。世界、人生を以て苦なりとし、禍なりとし、惡なりとし、不可解なりとし、世界、人生は望ましからざるものとして之を厭ふの厭世觀あるもの一理なきに非ずといふべし。

然れども世界、人生の暗黑面は其一方面、一部分的事項にして其全部に非ず。世界人生を暗黑方面のみとして之を厭ふべきものとなすは一局部に偏したるの見方、特殊の事項を以て全部の事項とするもの、低き階段（程度）の價値的標準によるも

のなり、低き程度の審判力が下すところの審判なり。

人智は日を追うて進歩し、蒸氣、電氣は人類の用に供せられ、無線電信、無線電話は發明せられ、寫眞の電送も行はれ、飛行機、飛行船は空中を翔る。炎暑の候、僅に一錢を投じて氷を求むれば數人の咽を樂ましめて餘りあり。醫術年毎に進みて病苦を減ずること大なり。慈善病院あり、育兒院あり、瘋癲病院あり。矛を執つて立つものも戰鬪力を失へば敵刄に苦しめられざるを今日の常則とす。東海道五十三次、鐵路に依れば所要の時間僅に拾餘、眠つて通過すべし。高山鐵道に搭ずれば高山に登るの勞少し。或は松島、嚴島、天の橋立、或はヒマラヤ山、アルプス山、或は東京、札幌、或は巴里、倫敦、ワシントン、一年を費さずして悠々目を慰め、耳を喜ばしめ、心を躍らしむべし。天氣豫報は人に利益を與ふ。暴風の警戒は禍を避け福を得しむるところあり。國家の法律は國制民福を增進す。人格の尊重すべきこと

は全世界に亘りて認められんとす。赤十字社の事業は世界的の博愛的事業なり。世の富者巨費を投じて人道の爲めに盡すところあり。動物虐待防止も善なり。死者を葬りて敬意を表するも善なり。教育を奬勵するも善なり。美なる哉、山川。靜に觀れば物各々其所を得たり。世界は進化の法則に支配せらる。天然界、人事界とも改善の針路を取る。

右、記するところ僅に世界、人生の光明的方面の一端のみ。世界、人生に於て智、眞を認め、世界、人生を樂しきもの、幸福なるもの、善なるもの、美なるものと解し樂世觀を懷くものあるも一理あることなり。

されど世界、人生の光明的方面のみに捕はれて其暗黑的方面を閑却するも局部を以て全部となすものにて、世界、人生に對する價値審判上間然するところあるものなり。故に斯かる樂世觀を得るの審判的能力、審判的標準よりも高き程度の審判

的能力、審判的標準を想像せざるを得ず。而して斯かる一層高き標準、能力に依る審判に比すれば右の如き審判は程度の一層低き審判なり。

かくて世界、人生の光明的方面を遺却する厭世觀も、其暗黑的方面を遺却する樂世觀も共に世界、人生の全局を捕へ、之を總括的、統一的、公平的に解釋、審判するものに對せしむれば局部的、偏頗的解釋、審判、非統一的解釋、審判なりと謂ふべし。かく公平的解釋となり、偏頗的解釋となるは解釋者の教育、觀察、研究等關係するところあるものなるが、人は自己の氣質、氣分に影響せられて世界觀、人生觀上偏することなきに非ざるべし。

快活なる氣質の人に對しては世界、人生は自然光明的に見ゆる傾向あるべし。是れ周圍の事物を自己の快活的狀態に同化すること、快活的事項を好むこと、事物の光明的方面に注意することの多きこと等に由るものなるべし。かくて此種の人は自

ら樂世觀に傾き易きものなるべし。然れども此種の人も往々にして憂鬱に陷ることあり。かく憂鬱的氣分に陷る時は又世界、人生を自己の氣分に同化する等により、そを暗黑視することあり得べきなり。憂鬱質の人と言ふべきものゝ內にても憂鬱に程度あるものなり。又苦蟲を嚙潰したるが如き外觀を呈する人なればとて其人の如何なる方面に於ても又如何なる時に於ても苦蟲的なりとは定まらざるなり。憂鬱的に見ゆる人にして頗る諧謔的の文を草するなど世に珍しきことに非ず。而して斯くの如き關係は人と其文との間のみに限るに非ざるなり。然れども世界、人生が憂鬱的の人に對して暗黑的に見ゆる傾向あることは快活的の人に對してそが光明的に見ゆる傾向あることに準ずるものなるべし。されど又厭世的傾向を有し乍ら宗教的關係に於ては樂世的の人もあり得べきなり。快活的にも非ず憂鬱的にもあらざる、其中間的の氣質を中和的氣質と呼べば志操の堅實なる如きは中和的氣質の人に多かるべし。事に臨みて平靜の態度を持續し得る傾向上、此種の人は世界、人生に對し價値的審判を下すに於て便宜なる境遇に立てるものなれども此種の人の審判は常に分平なるもの、正しきものとは言ふ可らず、又此種の人が憂鬱に陷ることもあるものなり。而して快活的の人、憂鬱的の人の如きに於ても右審判上、氣質上の惡影響を避け得ざるものとは限らざるなり。

然らば世界、人生は之を如何に解釋、審判すべきものなるかといふに、既記の如くにして、局部に偏せずして全局を見渡し、統一に之を解釋審判すべきなり。而して世界、人生の光明的方面に對しても其存在の權威を認め、又其暗黑的方面に對しても其存在の權威を認むるは、局部に偏するものに比しては確かに一歩を進めたる、一層高き階段の解釋、審判なりと言はざる可らず。されど斯く全局に着眼し、統一的に審判することの內に於ても亦種類の區別すべきものあり。光明的方面と暗黑的方面と

を分析、總合して認識し評價するに於ては是等兩方面を超越するところ素より之あり。されど此超越にも程度あり。殆ど其兩者内に沒頭するのみなるが如き態度と遠くよりして之を超觀するが如き態度とは超越の程度同一ならざるなり。而して超越の程度が高き丈、超越的方面の有効の程度も高きものなれども、超越の程度高きに從ひ、世界、人生の光明、暗黒兩面は次第に其存在を小にし其權威を低くし遂に無に歸するものなるが故に、世界、人生を超越し之に捕はれざると共に其光明暗黒兩面に接觸し、之に沒頭し、之に捕はるゝこと十分ならず、兩面の權威を認むること十分ならでは世界、人生の眞價を公平に判定すること難かるべし。かくて世界、人生の此兩面に捕はれずして捕はれ、捕はれ乍ら捕はれざるの審判的態度即ち沒頭的兼超越的態度が世界、人生を審判するに於て最も高き階段の態度なりと言ふを得べけん。但し此種態度を取る人に於ても其有する、使用する審判能力に高下あり、其能

力の程度高き丈、高き程度の審判、權威ある審判にして其最も高き能力によりて世界人生を審判するものが、之に對する理想的審判、標準的審判と言ひ得べきものなるべし。而して態度を取ることも能力に依るものなるが故に右言へることは其内より態度といふことを除去し單に能力につきて言ふも有効なるものなり。

然らば世界、人生は沒頭的兼超越的に之に對すれば價値上、如何に審判せらるべきものならか。世界、人生には大局上整然たる秩序あるべく、世界、人生には進化の法則が行はるゝものなるべきが故に大局上より見れば世界、人生は望ましからざるものと解すべきよりは望ましきものと解すべきなるべし。世界、人生の特殊的事項につきて考察するに、其光明的なるものゝ望ましきものなることは勿論なり。人は必然の法則に支配せらるゝと共に自由、自律の方面を有し、自己の主は自己にして自己は努力をなすを得、自然と共に自己を支配し、自然の幾分を支配し、人生の

經營に與かる。而して世界、人生を超越することによりて然らざる場合よりも快感を增加し不快感を減少すること多し。かくて人は或程度までは暗黑的事物を變じて光明的事物となすことを得。而して沒頭的兼超越的態度により世界、人生の光面的方面、暗黑的方面を通じて審判すれば世界、人生は望ましかちざるものと見るべきよりは望ましきものと見るべきなるべし。殊に世界の本體が全能にして極めて靈妙なることを信ずるの人が世界、人生に對するに於ては幽玄の快感に打たれ、恍惚として己を忘るゝが如きことあるものなるべく、斯かる人の世界觀、人生觀は自ら樂觀的のものなるべし。

(二) 世界人生の目的。

動物につきて一考せよ。目は何の爲めのものなるか。見るが爲めのものといふべけん。即ち目は見るの用をなす目的を有するものと言ふべきものならん。かくて耳には聽くの目的あり、鼻には嗅ぐの目的あり、舌には味ふの目的なりなど言ふを得べけん。呼吸器には呼吸するの目的あり、呼吸して生活に資するの目的あり、循環器、消化器、排泄器等にもそれぞれ目的ありと言ふを得べけん。植物に根、莖、幹枝、葉、花、實等あることに目的の認容せらるべきこと之に異ならず。現象的事項は總て世界の本體に其根抵を有し、此本體より分出せるものなり。而して現象中の動物、植物に於て目的の存するを見る。如何なる現象にも目的あること之に準ずるものならん。神經系統には之をして實際有する如き狀態を有せしむるの法則ありと言はざる可らず。火星、水星、木星、金星、土星、地球等が太陽の周圍を廻轉し、月が地球の周圍を廻轉するは然るべきの法則に從ふものなり。法則、法則に從ひての現象等にはそれぞれ目的あるべし。山水の美にして人の目を喜ばしむるも山水の一

の目的なり。或植物、或動物が人の食物となるも是等動植物の一の目的なり。

人につきて言はんに、各時代の人は（一面に於ては其時代時代の爲めの目的を有し、他面に於ては）總ての時代の内の一階段として全部の内に從屬するものとして全部の爲めの目的を有す。（草木の花、果實が人を喜ばしめ、人の生活に資するの目的を有するが如きも關係之に同じ。）又人には全世界の一部たるの（用をなす）目的あり、各個人には人類の一部分たるの目的あるなり。

人には必然的、因果的、他律的方面あると共に自由的、自律的方面あり。必然的、他律的なることも人の目的の一方面にして自由的、自律的なることも人の目的の一方面なり。かくて人には人の理想、人の目的を研究、摸寫、指定し、かく自ら定めたる理想、目的を追求するの能力あり。人には個々の行動に於て意志し、目的を定め、決行し、目的を達するが如き能力あり。散歩せんとて外出するには散歩の目的あり、

一層學問を深うせんとて某學校に入學するには目的あり。食料に供せんとて米を買ふには定めたる目的あり、生命を維持せんとて醫療を加ふるには定めたる目的あるなり。かくて人には自己が定めたる大小の目的、長き時間に亘る事項上の目的、短き時間内に於ける事項上の目的、自己が定めたる全部的目的、部分的目的あり。斯く自律的又他律的に云爲する間に、人（各個人、團體の人々、各時代の人々など）には自己存在の意義あり、自己目的あるものにして、人は、（世界の進化につきて言へば）世界の進化に關し全部の部分としての役目を果すと共に自己目的を果し行くものなり。

全部の部分としての目的を有し又自己目的を有することは人以外のものにつきても人に準ずるものなり。

世界の全部につきて言へば全部には秩序あり、調和ある如き目的あるものなるべ

し。

かくて世界の本體より分出せる事項の各部分及全部は其存在の目的を有するものなるべし。

然らば全部とし部分として目的を有する世界、人生及本體界に於ける派生的事項は何の爲めに發現、派生、存在するものなるか。世界の本體より分出する總ての事項は斯かる分出に對する、該本體に在る理由を滿足せしめんが爲めのものとも見るを得。然る處、世界、人生につきて言へば耳が有する聞くの目的、心が有する考ふるの目的の如きは世界、人生の內部の目的と見得べし。故に斯かる目的を世界、人生の內存的目的と言ひ、世界人生に對する、世界の本體在にる目的を世界、人生の外存的目的と言ひて可なるべし。(世界、人生をして如實ならしむる、世界、人生の外存的目的を手段的目的とする主要目的若しくは究竟的目的の如きが〔世界の本體に〕

ありや否やは斷言し難し。)

然らば世界の本體は意識を有するものなりや否や。是れ速斷し難きものなるが、人類より見ては世界の本體は無限の能力を有するもの即ち全能なるものと解し得べく、又無限に靈妙なるものと解し得べきが故に、該本體は意識をも有するものならんと推測せざるを得ざるが如き點なきに非ず。世界の本體が意識を有すると否とに拘はらず、該本體より分出する事項が內存的及外存的目的を有するものと解せられ得べきこと右述べしところの如し。

而して世界、人生が如實の內存的目的を有し、如實の狀態にて、如實の價値を有することの理由は靈間內に存在するものと言はざる可らざるなり。

〔四〕學問の種類。

學問或は學は之を大別して三種とすることを得べし。I、現象學、II、本體學、III、現象及本體學是なり。

現象學は現象、現象界、此世に關するの學なり。現象學は之を甲、現象內容の學と乙、現象內容及外圍の學とに二分することを得べし。現象內容の學は之を（甲）無機的即ち非生物的現象（事項）の學と（乙）有機的即ち生物的現象（事項）の學と（丙）有機的及無機的現象の學とに三分することを得べし。

物理學、化學、鑛物學、天文學、地文學、地質學、氣象學、天然地理學、天文地理學の如きは無機的現象の學に屬す。精神哲學に對立せしめらるゝ自然哲學も無機的現象の學中に屬すといふべし。

無機的現象の學に右の如き諸學を配當せるは主要なる關係によるものなり。例へば地文學にても生物につきて研究するところあり、地質學に於ても古生物につきて說述するところあるものなり。然れども地文學にても地質學にても其主要關係事項は無機物なるものなり。以下の配當に於て之もに準ず。

有機的現象の學は動物、植物に關するの學なり。此學は之を〔一〕一般の有機物に關するもの、と〔二〕特殊の有機物に關するもの、とに二分することを得。生物學は一般の有機物（生物）に關するものなり。特殊の有機物に關する學は之を一、植物に關するもの、二、動物に關するもの、三、動物及植物に關するもの、に三分することを得べし。植物に關する學は之を（一）一般の植物に關するもの、と（二）特殊の植物に關するもの、とに二分するを得。一般の植物に關するものは之を1、一般的事項に關するもの、と2、特殊的事項に關するもの、とに二分することを得。

植物學は一般の植物に關する一般的事項上の學なり。植物生理學、植物解剖學等は其特殊的事項に關するものなり。而して園藝植物學、藥用植物學、細菌學等は特殊の植物に關する學なり。

動物に關する學も之を二分して（一）一般の動物に關するもの及（二）特殊の動物に關するもの、となすことを得べし。一般の動物に關するものは又之を1、一般的のもの、と2、特殊的のもの、とに二分することを得べし。動物學は一般の動物の一般的事項に關するもの、動物生理學、動物進化論、醫學、藥學、衛生學等は一般の動物の特殊的事項に關するものなり。醫學上のことは植物にも關係なきに非ず。されど（獸醫學などいふことはあるも）植物醫學などいふことは未だあらざるべければとて醫學を一般の動物に關する學中に置けり。衛生學も醫學に伴はしめてこゝに置けり。細菌學には醫學中に屬せしむべき關係もあれども細菌が植物なるの點に

基づき細菌學は之を植物に關する學中に收め置けり。

特殊の動物に關するものは1、人類に關するもの、と、2、人類以外に關するもの、とに分つを得。人類に關するものは之を(1)一般的のもの、と(2)特殊的のもの、とに分つことを得。人類學は其一般的のものなり。倫理學、論理學、認識論、心理學、社會學、政治學、法律學、經濟學、家政學、法醫學、商業學、教育學、史學、古文書學、修辭學、文學、語學、新聞學、人生哲學、倫理哲學、實踐哲學、法理哲學、知識哲學、歴史哲學等は其特殊的のものなり。人類以外の動物の心理に關する動物心理學（比較心理學）、獸醫學の如きは人類以外の動物に關するの學なり。古生物學は動物及植物に關する學なり。然れども古生物學の如きは一般の生物(有機物)に關するものに非ずして古代の生物即ち特殊の生物に關するものなり。

人文地理學は勿論、地理學にても有機的及無機的現象の學に屬すといふべし。地

理學にては無機物（無生物）たる地球、地球に於ける無機物上の產物等無機物に關するのみならず、國、住民、政治、商工業等人類に關しても說述するところあるものなり。古代の生物、化石等を研究する考古學も有機的及無機的現象の學に屬すといふべし。但し斯くの如き學は一般の有機物及無機物につきての學には非ざるなり。美學は人工美に關すること多けれども天工美も美學の研究の對象中に屬するものなるが故に該學は有機的及無機的現象に關する學に配當して可なるべし。農學の配當も之に同じ。精神現象も自然現象中に包含せしめらるゝことあり。然る場合の自然哲學（即ち有機的及無機的事項に關する根本的研究の學）の配當も右美學及農學に同じ。

數學は有機的事項及無機的事項にも關係するものなれども又空間時間にも關係あるもの即ち現象の內容にも外圍にも關係あるものなり。現象哲學が現象の內容及外

圍に關すること勿論なり。

神學の如きも本體の學なりといふべし。形而上學といふにも本體論（本體學）と同義の場合あり。一般哲學を現象論と本體論とに二分する場合の本體論は本體學なり。

哲學即ち一般哲學は現象及本體に關する學なり。形而上學、認識論、論理學も哲學と同義なることあり。本體のことをも論ずる場合の宇宙論も現象本體兩界に關するものなり。哲學史は此兩界に關する學の歷史なるが故に此兩界の學中に數ふべきものなり。東洋哲學、西洋哲學、日本哲學、支那哲學、希臘哲學、佛教哲學、基教哲學、儒教哲學、宗教哲學の如きの各々の學の內容は廣狹淺深上必しも同一ならずと雖も孰れも現象的事項及本體的事項の學なりといふべし。

以上記せる學問の種類を表にて示せば左の如し。

學問の種類

I、現　象　學

甲、現象內容の學

(甲) 無機的現象の學——鑛物學、物理學、化學、天文學、地文學、地質學、氣象學等

(乙) 有機的現象の學

〔一〕 一般の有機物に關するもの——生物學

〔二〕 特殊の有機物に關するもの

一、植物に關する學

(一) 一般の植物に關するもの

1 一般的事項に關するもの——植物學

2 特殊的事項に關するもの——植物生理學、植物解剖學等

(二) 特殊の植物に關するもの——園藝植物學、藥用植物學、細菌學等

二、動物に關する學

(一) 一般の動物に關するもの

1 一般的事項に關するもの——動物學

2 特殊的事項に關するもの——動物生理學、動物進化論、醫學、藥學等

(二) 特殊の動物に關するもの

1 人類に關するもの

(1) 一般的のもの——人類學

(2) 特殊的のもの——倫理學、論理學、心理學、社會學、語學、

人生哲學等

2人類以外に關するもの——動物心理學、獸醫學等

三、動物及植物に關する學——古生物學

（丙）有機的及無機的現象の學——地理學、考古學、美學、農學等

乙、現象內容及外圍の學——現象哲學、數學

II、本體學——本體論、神學

III、現象及本體學——哲學、哲學史、宗教學等

學問は又其主要目的に從ひ、事實的學問と價値的學問との二種に區分することを得べし。科學につきて言へば此二者は事實的科學と價値的科學なり。事實的科學は事實を研究し之を記述もしくは說明することを其主要目的とするものなり。故に事實的科學は又記述的科學、說明的科學と言はるゝことあり。價値的科學は價値を研

究し、價値の高下を示し、價値の標準即ち規範を定め、理想を立するものなり。故に價値的科學は又規範的科學と言はる。天文學、地理學、人類學、史學等は事實的學問なり。倫理學は善惡なる價値的事項につきて研究するもの、美學は美醜なる價値的事項につきての學、論理學は眞僞なる價値的事項につきての學、衞生學は健康なる價値的事項の維持增進につきての學なり。かくて倫理學、美學、論理學、衞生學の類は規範的學問なり。政治學、數學等が價値的科學と言はるゝは、斯くの如き關係によりてなり。

斯く區別せらると雖も、規範的學問は事實上の研究を要するのみならず、價値的事項も事實的事項たる方面を有し、又事實的學問は一轉すれば規範的學問となる。而して學、科學と稱せらるゝものゝ多くは事實的研究、價値的研究の兩方面を包含するものなり。

哲學上の諸說。

以上は著者の信ずるところを主として述べたるものなり。以下未だ論及せざる哲學上の說を主として記載するところあるべし。

I、斷定、認識及斷定力、認識力。

(I) 認識の起源に關して。

認識の赴源（根源）と言はるゝものに關して經驗論あり、非經驗論あり。此「認識の起源」と言ふ語には種々の意に解せらるべきものあり。「認識」なる語は知識、眞理、科學、哲學などゝ同義に見る方、便宜なる場合あり。「起源」なる語は能力（機關）、基礎的意識などゝ解して可なるべき場合あり。

一、**經驗論**。　經驗論（者）は認識、眞の知識を經驗によるものとなすものなり。但し等しく經驗論と言はるべきものゝ內にも異同の點あり。認識を以て（外的）感覺に基づくものとなす經驗論あり。此種經驗論は同時に感覺論なり。又感覺と自己が反省（內省）によりて意識する精神作用（內的知覺）とを對立せしめ、是等を認識の起源となす經驗論あり。かくて經驗論と感覺論とを絕對的に同一のものとは見る可らざるものなるが、右（外的）「感覺」は感覺と外的知覺とを意味するものと見るべきなるべし。即ち認識の起源を感覺なりとする論者の「感覺」は感覺及外的知覺を意味し、認識の起源を感覺及內的知覺（論者が內的知覺の語を用ひずとも其意味上にて）なりとする論者の「感覺及內的知覺」は感覺、外的知覺及內的知覺を意味するものと解すべきなるべし。而して感覺及（內外の）知覺なる經驗は又直接經驗といふことを得。故に方法の方面より言へば經驗論は知識、眞理を獲得す

るの方法は感覺、知覺なる直接經驗を基礎とすべきものと解するものなり。而して感覺、知覺なる意識（斷定、認識）は感覺力、知覺力によりて得らるゝものなるが故に感覺、知覺を認識の基礎とする經驗論は能力の方面より言へば感覺力、知覺力を認識の基礎的能力とするものなり。

例へば英國のフランシス、ベーコンは認識の起源を經驗なりとなすものなるが、彼は經驗を基礎とし歸納法によりて事物の本性、法則を發見するを得とせり。然るに吾人が歸納法により事物につきて歸納的斷定、認識を得、事物の本性、法則を知り、知識、眞理、科學的知識、哲學的知識等を得るは吾人の推理によるもの、推理力によるものなり。同國のロックも經驗論者なるが彼は數學及倫理學につきて普遍的に確實なる認識が得らるべきものとせり。彼は吾人には先天的觀念なしとし、又神の存在を肯定し、而して神を以て全智全能なりとせり。然るに普遍的に確實な

ることを斷定し、吾人に先天的觀念なきことを斷定し、神の存在、性質を斷定するが如きは感覺にも知覺にも非ずして推理なり。佛國のコンヂャックは總て認識を以て經驗、(外的)感覺に基づくものとなすの經驗論者、感覺論者にして總ての精神作用の如きも感覺の變化となすものなるが、總ての認識、總ての精神作用は之を直接に意識するを得べきものに非ず、斯くの如き全稱斷定は推理によりて間接に意識せらるゝものなり。同國のエルヴエシウスも感覺論者にして行爲の原動力を自我(自己)の快樂とし、感覺的欲望の滿足を道德の原理とし、適當の統治をなすことを人の幸福を來す所以とし、人類の幸福は一に國家の制度に關係すとするものなるが、斯かる普遍的事項上の斷定は推理によらざれば吾人之を得ること能はざるものなり。

かくて經驗論者自らが如何なる解釋を下すも彼等の認容する認識、知識、眞理には直接意識なる感覺、知覺以外の意識なる間接斷定、推理を包含するものなり。而

して感覺、知覺を基礎として到達せらるゝ、感覺、知覺以外の意識、認識に對する場合の如きに於ても感覺、知覺は、經驗論者に取りて、認識の基礎意識たる關係を有するものなり。(感覺、知覺を基礎としての知覺も得らるゝものなり。)

經驗論者に在りても普遍的事項上の認識、例へば兩手を打合すれば音響生起すといふが如きことの認識は蓋然的認識にして必然的普遍的に眞なるものとは斷言し難きものなることを信ずるほど斷定上精密なるものあり。かゝる人々より見ては感覺知覺を基礎とし歸納法によりて得られたる即ち經驗を基礎として得られたる普遍的知識は(數學を除き)蓋然的知識、蓋然的認識なるものなり。

經驗論者は感覺知覺なる經驗を認識の起源となすと共に、たとひ言明せずとも、感覺知覺にも(正しき)認識ありとするものなるべし。而して總ての認識の起源は感覺、知覺に在りとの說は有せずとも、感覺、知覺に認識あり、感覺知覺によりて

認識の得らるゝものありと信ずる人は、相對的經驗論者といふことを得べけん。或範圍内、相對的範圍内に於て認識が經驗によりて得らるゝことを信ずるものなればなり。

普通の人は不知不識の間に相對的經驗論者たるものなるべし。鈴を振つて音を聞けば是れ鈴が鳴るなりとし、梨を喫して甘美を感ずれば是れ梨の甘美なるなりとし、某の山水を美なりとし、雪を白きものとする等普通の人に於て常にあるところなり。即ち普通の人は斯かる經驗によりて正しき斷定をなしたり、眞の認識を得たりと信ずるものなり（假令斷定、認識等の言語を用ひずとも）。のみならず、感覺知覺によりては眞の知識、眞の認識を得ずとの說を有する非經驗論者に於ても此主張と日常の斷定との間には矛盾して相容れざるものあり、斯かる論者は日常の斷定上に於ては自己の說を裏切りて（相對的）經驗論者たるものなるべし。

二、非經驗論、唯理論。　非經驗論は認識、眞の知識を經驗によらずとなすものなり。非經驗論は普通、唯理論（主理論、純理論）と稱せらる。唯理論は認識の起源を理性に在りとなすものなり。非經驗論者は先天的直覺を容認す。先天的とは前にも記せるが如く非經驗的といふと同義なり。該論者は經驗によらずして得らるゝ原理、意識、認識を基礎として認識、眞の知識を吾人が得るものとなす。例へばデカルトは自己の存在することを一點の疑なきものと確信し、之を基礎、出發點として他の事項を推究せり。然らば彼は此自己意識を何によりて得らるゝものとなすか。經驗によりてとか。然らず。彼は、自己意識は自己の理性によりて非經驗的即ち先天的に直覺的に得らるとなすなり。即ち彼に在りては自己意識は先天的直覺なり、而して理性によりての直覺なり。此自己認識を出發點として獲得せらるゝ確實なる知識は理性の先天的（即ち純粹）思考、純粹推理によるものなり。數學に於ても公

理の如き數理上の原理を先天的に直覺し、之を基礎とし純粹推理によりて數學上の他の知識を獲得するものとす。他は之に準ず。是れ彼の所說にして、此點に於ては彼は非經驗論者、唯理論者なり。(されど自己が自己の存在を直覺することは內的知覺にして此知覺を得るは經驗と言はるべきものなり。故にデカルトは其學問、哲學の基礎を經驗に置くものと言はるべきものにして此點より言へば彼は經驗論者中に數へらるべきものなり。)

カントも眞の認識を以て先天的のものとなすものなり。彼は時間空間の觀念、數學の原理其他認識の基礎となる觀念は吾人之を先天的直覺によりて得るものとなし、眞の認識は斯くの如き(普遍的必然的なる)先天的觀念を基礎とし先天的論究によりて獲得せらるゝもの、獲得せらるべきものとなす。然れども既に記せるが如くにして直接に意識せらるゝ時間空間は時間空間中の一小部分にして而して是等意

識は經驗によるものなり。數理の直接に認識せらる可らざることは前に述べ置きしが如くにして、數理推究の基礎となるべき公理の如きも直接に認識せられず、推理によりて獲得せらるゝものなり。總て法則の如き普遍的事項上の認識は間接にのみなし得らるゝものなるべし。

理性、悟性の語は種々の意に使用せらるゝものなるが、認識上の兩者は共に大體上、推理力と見て可なるが如し。悟性は自然界に於ける因果の法則、物質不滅の法則の如きを認識すとせらるゝ場合の悟性も推理力なり。理性は世界全體を總括して考察すなど言はるゝ場合の理性も推理力なり。(右記デカルトの場合に於て理性が自己直觀をなす如きは、そが直接認識力として取扱はるゝものなり。)先天的觀念を有し、先天的考察をなすとせらるゝ理性は純粹理性と言はるゝものなり。

カント謂へらく。吾人の心、理性は世界の事物を認識するに當りて適用すべき形

式、法則を具有す。吾人は本體(物其物、物自身)を認識するを得ずと雖も、本體が吾人を刺戟し來るに應じ吾人の先天的に有する右法則を適用して此刺戟を解釋す。此解釋せられたるものは世界即ち現象世界の事物なり。吾人が世界の事物を斯く解釋することは吾人が之を產出し創造するものなり。此解釋、創造が、吾人が世界の事物を認識することなりと。單に認識の形式、法則たる點は觀念、認識には非ざれどもカントに於ては斯くの如き形式は觀念、概念なり。是等形式中の時間、空間は先天的觀念にして因果等の範疇は先天的概念なり。かくて、カントに於ける是等形式には、認識の基礎となる意識といはるべき點あるなり。

時間空間につきては右にも言へり。因果的關係にして(經驗上)直接に意識せらるゝ場合あることも前に記せり。されど因果の一般の關係につきては吾人之を推理によりて認識するものにして此推理は因果的關係の直接認識等經驗に基づくものなり。かくて因果上の認識の如きは先天的に得らるゝものに非ざるなり。

先天的形式論者によれば吾人は理性により、此形式に從ひて認識を得るものなれども其認識の範圍は現象界內に限局せらるゝものにして吾人は本體を認識し得ざるものなり。されど然かく本體を認容するところは該論者が本體につきても認識するを得となすものと見るべきなり。

非經驗論者中には生得觀念(天賦觀念、本有觀念)說を唱ふるものあり。論者謂へらく、例へば因果の觀念は經驗によりて得らるゝものに非ず、吾人が生れながらにして有するもの、生得(天賦、本有)のものなりと。かくて數理上の原理の觀念、自己觀念、神の觀念の如きも、彼等によりて、生得觀念とせらるゝものなり。デカルト等は生得觀念論者なり。

希臘のプラトーン、獨逸のライブニッツの如きは生得觀念論者中にありても特殊

のものといふべし。プラトーン思へらく、吾人の靈魂は現世に入り來る前、前世に存在せしものにして此前世に於て得たる觀念を把住し居り、此世の事項を緣として把住觀念を想起するものなりと。ライブニッツによれば吾人の觀念は總て生得的のものなり。感官によりて起る知覺の如きに於ても此生得のものが開展するに過ぎざるものなり。

されど生得觀念說は容認すべきものに非ざるべし。

三、經驗論及非經驗論餘論。　經驗論及非經驗論につきては既に幾干か批評するところありしが尙少しく附記するところあるべし。認識上の理性、悟性の語の如きは之を心理學、論理學等にて研究するところの精神作用(精神的能力)殊に推理(推理力)と對照して其異同を考察するの必要あるべく、又之が爲めに受くる利益あるべし。

類似差異上の關係(統一)、部分と全部との關係、因果的關係、第四種關係の孰れに於ても直接に認識せらるゝものあり、又間接に認識せらるゝものあり。而して斯くの如き認識には分析作用及總合作用も包含せらるゝものなり。甲と乙との間に因果的關係ありとするには兩者の間の區別を認むるところあり、又兩者を總合して見るところあるなり。乙を甲の一部分と認識するにも分析、總合するところあり、甲と乙とは類似す、甲と乙との間に差異あり、甲と乙とは同一物なり、甲と乙とは別物なりと意識するところにも分析總合上の斷定あり。第四種關係に於ても之に同じ。かくの如くにして直接斷定(認識)、間接斷定(認識)、直接斷定(認識)力、間接斷定(認識)力は認識の總ての種類、總ての認識能力を其中に包含するものと言ふべけん。理性、悟性の如き素より其中に在るなり。但し直接、間接の斷定、認識、直接間接の斷定力、認識力中に於て、殊に推理作用、推理能力中に於て理性、悟性

といふ如きものを特に摘出して研究するの必要若しくは利益ありとせば素より其勞を惜むべきに非ざるなり。

推理力は感覺、知覺、想起的事項、推理的事項、想像的事項等を基礎として感覺、知覺以外の事項を推理するを得るものなり。例へば雨天に太陽を見ずして其存在を推測する場合に於ては太陽は感覺せられ、知覺せらるゝものには非ず。物理學、化學、數學上等に於ける諸種の普遍的事項、法則、關係の如きは吾人之を感覺し、知覺するを得ざるものなり。故に經驗といふことを感覺、知覺の如き直接經驗に限れば右の如く推理せられたる事項は經驗せられざる事項、經驗を超越せる事項即ち超經驗的事項、非經驗的事項なり。而して太陽の如きは雨天ならざる折之を直接に意識するの機會あるものなれども、法則、世界の本體などの如きは之を直接に意識するの機會なきものなり。從つて認識には超經驗的事項上の認識あるものなり。故に超經

驗的、非經驗的なることを先天的など言へば先天的事項上の認識、先天的事項上の推理あり、又先天的事項上の觀念あるものなり。然れども、斯かる先天的事項上の認識、先天的事項上の觀念の如きは經驗によらずして得らるゝものには非ざるなり。(かゝる超經驗的、先天的事項上の認識は間接經驗といふを得。)

(II) 認識の本質に關して。

認識の本質と言はるゝものに關して實在論あり、現象論あり、觀念論あり。吾人は實在を認識するを得となすものは實在論なり。吾人は實在其物を認識するを得ず、吾人が認識するものは現象なりとなすものは現象論なり。吾人が認識すとなす現象は吾人心意の所產即ち觀念なりとなすものは觀念論なり。而して現象論と觀念論とは同一視せらるべき場合あるものなり。而して玆に認識の本質と言へるは、吾人の

認識の對象即ち被認識的事物は如何なるものなるか、吾人は如何なるものを認識するものなるかといふと同義なり。故に此本質論につきては以下、斷定、認識の對象に關する說中に於て重ねて述ぶるところあるべし。

II、斷定、認識の對象。

(I) 一般的實在論。

實在論、現象論、觀念論など言へば實在に關し、現象に關し、觀念に關する說、論なるが如くにも聞ゆれども此意と異りて是等の語の使用せらるゝことのあること既に記せるところの如し。實在といふ語に、本體、世界の本體といふと同義なる場合あり、又實際存在するものといふことを意味する場合あり。玆に實在論と言へるは右後者なる意なり。かくて實在論は存在物、存在物の狀態につきての說として取

扱ひ得べきなり。實在論は批判的實在論と非批判的實在論とに區分せらるゝことあり。

吾人が感覺し、知覺する如き事物につきて特に批判的態度を取るには非ずして自然に其存在、存在の狀態即ち實在を信ずるところあるは非批判的實在論なり。例へば色、光、味、溫の如きが意識せらるゝ通りに物質に附屬して實在し、鐘の鳴ることは事實にして、精神作用が吾人が意識する通りに存在することを自然に信ずるが如きは批判的態度を取らざるものとせらる。斯くて此種實在論は又朴素的實在論若しくは自然的實在論など言はる。而して朴素的實在論にも誤謬は包含せらるゝものなれども右に擧げたる例の如きが是認せらるべきことは前に記せるところの如し。朴素的實在論は一概に排斥さるべきものに非ざるなり。

批判的態度によりて實在、實在の狀態につきて斷定するは批判的實在論なり。普

通、物質(物體)の色、音、香、味など言はるゝ事項は吾人が物質の或狀態の運動に接して之を然かく意識するもの即ち主觀的現象、精神的現象にして主觀を離れて別に存在するものに非ずと雖も、吾人を刺戟して是等の意識を起さしむる物質の運動は吾人の意識を俟たずして客觀的に存在するものなりと斷定するが如きは科學的實在論と言はる。科學的研究に基づけるものなればなり。科學的實在論も批判的實在論の內に屬す。批判的實在論とて盡く眞なるには非ず。右例の如きも誤謬を包含するものなるべし。

かく朴素的實在論と批判的實在論とを區別すれども其境界線は明確ならざるものなり。例へば喇叭の音を聞き是れ喇叭の音ならんと推測するは批判的なるか、朴素的なるか。以前の經驗に照し自然に斯く推測し斯く信ずるの點よりいへば非批判的とも解し得べきが如し。然れども斯く推測するは基礎なく、理由なくして然かす

るに非ず、斯く推測すべき正當なる根據たる經驗あるものなり。故に右喇叭の音ならんと推測するには批判的の點ありとも言ふを得べきなり。

所謂認識の起源に關する說中の唯理論は認識を以て理性によりてのみ獲得せらるゝものとなすものなり。即ち唯理論は實在は理性によりて而して理性によりてのみ認識せらるとなすものなり。かくて此種の實在論は唯理的實在論と言はる。所謂認識の起源に關する經驗論は唯理的實在論に準じて經驗的實在論と言はれ得べし。然るに經驗的實在論といふには他の意味のものあり。カント思へらく。時間は主觀的のものなれども(外界及內界の)現象即ち吾人の經驗するところのものは必ず時間內に存在す。是れ客觀的、普遍的に事實なり。外的現象の空間內に存在すべきこと之に同じと。而してカントは時間空間が斯くの如き客觀的普遍的有効性を有するより時間空間の經驗的實在を說けり。是れ彼の經驗的實在論なり。

非實在論（虛無論、皆無論）即ち存在、實在するもの一もなしとの說をなせし人なきに非ず。然れども此說をなす人にして一方に於ては之を肯定し乍ら他方に於ては之を否定するものあり。又假令極度まで之を主張する人ありとも其主張者の存在は之を否定するを得ざるなり。故に皆無論は徹底せざるの說なり。例へば佛敎徒龍樹な一切空なりとし、認識を不可能とし、無宇宙論を唱へしと雖も他面に於ては眞あり、智あり、到達せらるべき彼岸あることを信ぜり。故に彼は絕對的皆無論者には非ざるなり。希臘の詭辯論者中のゴルギアスも皆無論者なり。彼思へらく。何物も存在せず。假りに存在するものありとするも吾人之を知るを得ず。假りに之を知り得とするも其知識を他の人に傳ふるを得ずと。此斷定上、彼は少くも彼自身を忘却せるなり。

右實在論は一般に實在に關するものを主とせるものなり。以下特殊の實在に關す

る說につきて述ぶるところあるべし。

（II）範疇。

範疇の語にて高き階段に於ける類を意味することあり。哲學若しくは論理學に於て普通、範疇といふは此意味のものなり。（高き階段の類は一般の事項、存在に非ず、特殊の事項、存在なり。）

本書に於て根本的に分類せし事物の種類を表にて示せば左の如し。

- 存在
  - 存在
  - 存在物の狀態
    - 分量
      - 個々的狀態
      - 關係的狀態
    - 性質
      - 個々的狀態
      - 關係的狀態
      - 類似的
      - 總和的
      - 因果的
      - 第四種關係的

- 存在物
  - 本體界
  - 現象界
    - 外圍
      - 空間
      - 時間
      - 靈間
    - 內容
      - 實現物
        - 事實的現象
          - 要素的現象
            - 空間的現象（物質的現象）
            - 靈間的現象
              - 精神的現象
              - 準精神的現象
              - 非精神的現象
          - 要素の結合せる現象
            - 有機物
            - 無機物
        - 價値的現象
        - 法則的理由
      - 理由
        - 法則ならざる理由

右存在といふは事物などゝ言換ふることを得。存在物の狀態は存在物の屬性といふを得。

希臘のアリストテレースの範疇。一、實體（類）二、分量　三、性質　四、關係　五、場所　六、時間　七、態度（立ち、坐り、歩き、思ふ、などの如き）八、狀態（着衣せる、武裝せる、健康なる、喜べる、などの如き）九、能動　十、受動

希臘のストア派の範疇。一、實體　二、必然的屬性　三、偶然的屬性　四、關係

デカルト、和蘭のスピノーザの範疇。一、實體　二、屬性　三、樣式

ロックの範疇。一、實體　二、樣式　三、關係

ライプニッツの範疇。一、實體　二、分量　三、性質　四、受動或は能動　五、

關係

カントの範疇は十二あり。次の如し。

一、分量
- 單一
- 數多
- 總計

二、性質
- 實有
- 非有
- 制限

三、關係
- 實體
- 因果
- 交互作用

四、樣式
- 可能（不可能）
- 存在（非存在）
- 必然（偶然）

カントは吾人の心内に先天的に備はれる認識の形式、法則ありとし、而して直接認識の形式を時間、空間の二なりとし、間接認識の形式を右の十二なりとせり。而してカントに於ては範疇は又統一（關係）の種類を意味するものなり。即ちカント

は統一、關係の種類を以て十二ありとなすものなり。かくて右分量、性質、樣式と對立せる「關係」は之を包括する「關係」の内の特殊の關係と見るべきものなり。されど世界の事物間の關係、統一は吾人の心内の先天的形式に非ず、吾人の意識を俟たずして存在するものにして吾人は此統一、關係を認識する能力を有し、之を認識するものと見るべきものなるべし。

獨逸のヘーゲルの範疇は畢竟、世界の事物の種類を意味するものなるが彼は事物の生成、存在するに至る關係即ち事物開展の關係より範疇を認識せんとするものなり。彼によれば世界の事物は正、反、合の順序にて開展するものなるが故に事物の種類も正、反、合の順序にて開展、生成、發生するものなり。彼思へらく。最初の、第一の範疇は「有」なり。此「有」や單に有りといふことの外、何等の内容をも有せざるものなり。故に此「有」は有が無の方に近づく極限の場合の如きものな

り。かくて此「有」は又「無」なる事情の下に立つ。よりて「無」なる第二の範疇開展す。されど無は無にて有るものにて即ち有なり。故に此「有」と「無」とは畢竟同一のものなり。有は無となり、無は有となり、有は無の内に包含せられ、無は有の内に包含せらる。かく有が無となり、無が有となるは生成なり、開展なり、發生なり。即ち有（なる正）と無（なる反）と相合し（合）、調和し、總合、統一せられて成（生成、發生）なる第三の範疇開展すと。かくの如くにしてヘーゲルの範疇は開展生成し内容益々豐富となり行くものなり。

(III) 時間、空間。

（時間空間を以て精神内的事項、實在となすも、精神外的事項、實在となすも時間空間は或實在、特殊の實在なり。）

カントは時間及空間を以て吾人の心に先天的に具はれるもの、直觀（直覺）なりとなす。カント思へらく。吾人は、感覺、外的知覺の對象間（物質、物質上の現象間といふを得ん）に甲乙等、別々のものたるの區別あり、又甲乙等が丙の所、丁の所等、所を異にして存在することを意識（經驗）するものなるが、對象（現象）が斯くの如くなることは空間を豫想するものなり。（即ち空間は斯かる現象の生起するよりも以前より存在せるものとせざる可らず。）又事物（物質的現象）なき空間を考ふるを得れども空間内に於て生起するに非ざる物質的現象を考ふるを得ざるなり。（即ち物質的現象は空間を豫想するものなり。）故に（空間は物質的現象よりも以前よりありしと言ふべく、吾人が物質的現象に接して之を意識、認識、經驗する以前より空間は存在せるものといふべく、即ち）空間は先天的のものなり、先天的觀念なり。（カントに於ては時間空間は認識の形式、法則にして先天的のものたると共に觀

念なるものなり。〕時間の先天的觀念たることも右空間につきて言へるところに準ず。吾人は事物が時を同じくし、或は時を異にして現象することを意識、經驗す。吾人の經驗の對象、現象が斯くの如くなることは時間を豫想するものなり。(即ち時間は現象の生起するよりも以前より存在せるものとせざる可らず。)又吾人は事物、現象なき時間を考ふるを得れども時間内に於て生起するに非ざる現象を考ふるを得ざるものなり。(即ち現象は時間を豫想するものなり。)故に(時間は現象よりも以前よりありといふべく、吾人が現象に接して之を意識、認識、經驗する以前より時間は存在せるものと言ふべく、即ち)時間は先天的觀念なりと。

カント思へらく。空間は類概念に非ず。例へば初めに數多の鳥あり、是等の鳥に共通なる點を抽象して得たる鳥といふ概念は一の類概念なり。空間は斯くの如きものには非ず。空間は唯一のものにして部分的空間は單に唯一の空間を區切りたるものゝみ。部分的空間より抽象して全部なる空間を得るものに非ざるなり。又例へば鳥といふ類概念は個々の鳥よりも上に位し、個々の鳥は鳥といふ類概念の下に位する者にして而して鳥といふ概念(の内包)は個々の鳥の有する諸屬性中に在りて共通なる點のみを有す。然るに部分的空間は盡く(全部なる)空間中に包含せらる。かくて空間は類概念には非ず、部分的空間より抽象せられて間接に知らるゝ者には非ずして直接に知らるゝ直覺(直觀)、先天的直覺なり。時間に於ても之に準ずと。

カントは時間、空間を以て吾人の心内に存する形式、法則となす。彼、空間につきて思へらく。空間が吾人の心の形式、法則として先天的に吾人の心内に存在し、吾人をして空間的事項の直觀を得しむるに非ざれば幾何學上の先天的認識は得らるべきものに非ず。然れども幾何學上の先天的認識は得らるゝものなりと。時間に關するカントの見解も之に準ずるものなり。

斯くカントは時間空間を以て先天的のもの、觀念、直覺、認識の形式、心内に存在するものとなすなり。なるほど時間空間は吾人の經驗を俟たずして存在するものなるべし。吾人は時間空間につきての觀念を得。然れども時間其物、空間其物は觀念には非ず、又吾人の心内に存在するものには非ざるなり。空間内に存在する物體の廣がり、事物の時間内に於ける前後の關係等吾人が直接に意識し得るものあり。例へば一の林檎は吾人之を見、或は手にて觸れて其形狀大小を直覺するを得るなり。(地球の形狀、大きさの如きは吾人に直接に意識せらるゝものに非ず。)或物體の存在する時間の長さ若しくは或音と音の内孰れが時間上前にして孰れが後なるかの如きも吾人之を直接に意識し得ることあり。されど直接に意識せらるゝ斯くの如きものは事物が空間時間を占領する狀態にしして空間其物、時間其物には非ず。吾人は空間其物、時間其物につきても直接に認識するを得。然れども斯く直接に認識せらるる空間其物、時間其物は空間、時間の一部分たるに過ぎざるものなり。故に「時間空間は直觀なり」とは言ふ可らざるなり。又時間空間は之を吾人の心内に備はれる、認識の形式、法則と言はんよりは、吾人は事物が時間空間を占領せる狀態(及時間空間其物)を認識し得る能力、精神的能力を有するものと見るべきなるべし。

(VI) 究竟的實在。

究竟的實在(究竟的存在物、究竟的事物)の數に關して一元論、二元論、多元論あり。究竟的事物若しくは空竟的原理の數を一なりとなすものは一元論なり。其數を二なりとなすものは二元論なり。其數を三箇以上なり(二よりも多し)となすものは多元論なり。究竟的實在の質に關しても異なれる說あり。究竟的實在(の質)を物質なりとなすものは唯物論なり。そを精神なりとなすものは唯心論なり。究竟的

實在につきては研究すれども其質に關しては說を立てざるものあり。不可知論は究竟的事物を以て不可認識のものとなすものにして其質につきては論ぜざるものゝ內に屬す。以下究竟的實在に關する說を唯物論と非唯物論との二大種類に區分して叙述するところあるべし。

甲、唯物論。

究竟的事物を物質のみとする唯物論にも變遷ありしが、該論には學術の進步と調和を謀らんとするの傾向あり。古の唯物論者例へば希臘のデーモクリトス派は靈魂を以て原子より成るものとする等今日の學問に照し認容し難き見解を有せり。今日の唯物論は大體上物理學、生理學、心理學等の所說を採用せんとす。彼等思へらく。色、音、味、熱の如きは精神作用、意識のみ。客觀的に存在するものは物質、物質

の運動なり。引力、電氣等の如きも物質の作用たるのみならず、精神作用も物質の或狀態の結果、物質の作用なり。即ち精神作用を生ずるものは神經系統、腦髓なり。精神作用の營まるゝところ必、生理的、物質的變化あり、精神現象（狀態）は總て物質現象（狀態）を以て說明し得べきものなり。世界は進化す、生物は進化す。人類の最初の出現は或一定の過去にありて其以前には人類なし。物質的狀態に變化ありて精神作用も發現するに至り、物質的變化尙進みて人類の精神作用を見るに至れり。かくて精神作用は之を客觀的に考察すれば生理的、物質的變化（現象）に外ならず云々と。

精神作用と之に平行する即ち之と同時伴生する物體的狀態との間には嚴密に言へば因果の關係ありとは言ひ難きも便宜上、因果的關係ありと見得べきこと既に記せるところに準ず。又假令兩者を因果的に見ず平行的に見るに於ても一方を以て他方

を説明し得べく、故に物質的狀態を以て之と同時伴生の精神作用（意識狀態）を説明し得べきなり。かくの如くなるが故に唯物論者が物質的狀態を以て意識的狀態の原因とし、前者を以て後者を説明せんとするには相當の理由の存するものあるなり。然れども唯物論者の説くところは事物の一面、事物の一部分のみ。唯物論は絶對的に眞なるものには非ず。其物質と物質の運動との二者より萬物生ずとし、精神作用を物質的狀態に過ぎずとなすの類は唯物論が誤謬に陷れるものなり。

唯物論は一般的に見て一元論と稱せらる。唯物論は究竟的實在を以て物質といふ一原理、唯、一種類の事物となせばなり。此點に於ては唯物論は唯物的一元論なり。然れども唯物論中に多元論と稱せらるるものあり。例へばデーモクリトスの唯物論の如し。彼は物質に無數の原子ありとし而して是等原子を究竟的事物となせばなり。かくてデーモクリトス派の唯物論は唯物的多元論と稱せらるゝなり。

乙、非唯物論。

本書が究竟的事物に關する説にして唯物論に非ざるものは之を非唯物論中に收めんとすること既に記せるところの如し。

一、一元論。

（一）一神論。

一神論は究竟的事物を以て一の神なりとなすものなり。一神論は又一神教、唯一神論、唯一神教など言はる。而して是等名稱につき哲學上の用語法と宗教學上のそれとを區別すれば一神論など論の語の附くは寧ろ哲學上の語にして一神教など教の語の附くは寧ろ宗教學上の語なり。以下論、教の一方のみを言ふ場合に他方を言ひ

得べきこと勿論なり。一神論中にも異れる見解あり。

1、超越神教。　神は世界の起源なれども世界を超越し世界の外に在りとなすは超越神教なり。超越神教に人格神教、超然神教あり。越然神教は、神は世界に干渉せず、世界をして一定の法則に從ひて存在、進行せしめ、世界に於て天啓、奇蹟の如きを行ふことなくして自らは世界の外に超然たりとなす。かくて超然神教は又自然神教、理神教など言はる。人格神教は神を以て世界に對し超然たる態度を取るものに非ずとし、天啓、奇蹟の如きを行ふものとするものなり。即ち人格神教は神に自由的所爲ありとし、人格的狀態ありとするものなり。人格神教は又擬人的神教、有神教、信神教など言はる。超越神教中には一面に於て神を以て人を超越すとし乍ら他面に於ては神の一部分を以て人間内に存在するものとするものあり。

2、萬有神教。　世界（萬有）と神とを全然同一物なりとなすは萬有神教（汎神教）

なり。希臘のクセノフアネースは、神は唯一なりとなせるものなるが彼は世界なる一體即ち神なりとせり。故に彼は萬有神論者なり。世界と神とを全然同一のものと見る萬有神教は、神を超越的のものに限るの見解に從へば無神教なり。世界は神の全部に非ずして其一部分なり、世界は神より發現せるものなりとなすは萬有在神教なり。但し萬有在神教も萬有神教と言はるゝことあるものなり。超越神教に在りても世界（萬有、現象世界、此世）の根源を神と解するものなるが故に該教に從ひても世界は神より出でたるものなり。故に、超越神教は要するに萬有在神教、萬有神教中に屬するもの、少くも一轉して萬有在神教、萬有神教となり得べきものなり。かくて萬有在神論者は其數少からず。印度哲學に於て世界を梵、若しくは眞如より分出せるものと解するも萬有在神教、萬有神教なり。

(1) 絶對的自我論。　婆羅門教に於ては吾人は世界の實在、究竟的實在たる梵天なり。

婆羅門教の此點は絶對的自我（絶對我）論なり。萬有神論は一轉すれば絶對的自我論となり得べきものなり。何となれば萬有神論は吾人を以て絶對者、究竟的實在より分出せるもの、絶對者の一部分なりとなすが故に、該論に於ては吾人は小我にして絶對者は大我たるの關係あり、而して此關係につきての思想一轉すれば我、吾人、小我は大我たる絶對者、世界の本體なりとの斷案を得べきものなればなり。但し斯く吾人を以て絶對者なりと解せずして絶對者を呼ぶに自我なる語を以てせしものあり。獨逸のフイヒテは其一人なり。されど彼が吾人即ち個人的自我（相對我）も、又非我即ち客觀世界（自然）も絶對者なる自我即ち絶對我の所產なりとなすの點は小我を以て大我なりとなすものには非ざるなり。

絶對的自我論が萬有を以て絶對的自我より出現せるものとなすは萬有神教、萬有在神教なり。

(2)無差別的一元論。　獨逸のシエリング思へらく。精神即ち主觀と自然即ち客觀とは絶對者に於て融合せられ、同一となる、無差別となる。此絶對者は即ち平等無差別なるものなり。無差別なる絶對者が精神及自然即ち萬有として發現するものなりと。是れ無差別的一元論なり。

世界の根本的實在を無差別なりとするの見解は古代より存するものなり。希臘にてはクセノファネース等既に一神教を唱へ、而して神を唯一、不生不滅、不變不動のものとせり。印度哲學に於ける梵、眞如の如きも世界の根本的實在にして無差別平等のものとせらる。

無差別的一元論が萬有を以て無差別的本體より分出せるものとなすは萬有神教、萬有在神教なり。

(3)活動的一元論。　希臘のヘーラクライトスは萬物を以て生成し、變化するものと

し、世界の根本的事項を以て生成、變化なりとせり。彼曰く、「鬪爭は總ての事物の父なり」と。而して彼の說には活動を以て世界と解するの活動的一元論の方面あるなり。ヘーゲルによれば世界は正、反、合の訓序を追うて開展するものなるが、彼が究竟的實在（理性、神）を以て世界の開展、生成其物なりとなすの點は活動的一元論なり。

右の如き活動的一元論は萬有神敎なり。

(4) 一體兩面論。　スピノーザ思へらく。現象は思考即ち精神及延長（廣延）即ち物體（物質）の二種に大別するを得。此二種の事物は世界の究竟的實在なる實體即ち神の屬性なり、神の屬性として吾人が知り得るものは此二種に限る。（而して物質と精神〔精神作用〕との間には因果の關係なし。物質的事項の原因は物質的事項にして精神的事項の原因は精神的事項なり。されど精神作用と物質的狀態とは必ず相伴ひ、

平行し、一致するものなり。故に一物とても心なきものなし）と。右の如く物質と精神とを究竟的實在の二屬性、兩面なりとする見解は一體兩面論、內存的（內在的）二元論と稱せらる。

かゝる一體兩面論（內存的二元論）は萬有神敎、萬有在神敎なり。

（物質と精神と普遍的に平行すとの說は普遍的平行論、物心平行論と言はれ、萬物は心を有すとの說即ち萬有有心論は又萬有精神論もしくは汎心論と言はる。ライプニッツ、獨逸のロッツエ等も萬有有心論者なり。萬物は生命を有すとの說即ち萬有有生は又物活論と言はる。而して物活論は殆ど萬有有心論と同一視され得べし。）

(5) 不可知的一元論。　カント及英國のスペンサー等は世界の根本たる事物の存在を容認すと雖も此事物を以て認識不可能のものとなす。然れども此不可知物は世界の總ての事物として顯現するものとせらるゝものにして彼等の不可知論は不可知的一

元論といふべく而して此不可知物はカントに於ては神、スペンサーに於ては力と言はるゝものにして而して物質と解せらるゝものに非ざるなり。

かくの如き不可知的一元論は萬有神教、萬有在神教なり。

上來記せしところの如くにして根本的實在は之を或は神と言ふことあり或は然らざることありと雖も西洋に於ては日本語にて神と譯せらるゝ語を以て之を表示するを普通とす。神と言ふと言はざるとは唯名稱上のことにして根本的實在を表示するに適當なるものならば如何なる語を用ふるも妨ぐるところなきが故に本書に於ては「神」なる語を以て同義の他の語を代表せしむることゝし、不可知的一元論の如きも一神論の題目の下に收めたるなり。

(二) 唯心論。

以上一神論の題目の下に記述せるは究竟的實在が精神的(心的)のものと見らるゝことある場合及然らずとも物質的のものとは見られざる場合を包含せるものなり。例へば、神と言はるゝは精神的のものと解せらるゝ場合あり。然れども神を世界の根源、世界の創造者とは信ずる人にして、そが精神的のものなりや將た物質的のものなりやにつきては所信なきものも多かるべし。不可知的一元論を唱ふる人は其の一元物が精神的のものなりや物質的のものなりやにつきては斷定せざるものと見ざる可らず。以上一神論とせるが如き說にして一神なる究竟的實在を精神、精神的のものと解するものは唯心論なり。究竟的實在を精神(的のもの)なりとする見解は其實在の數を幾箇と立つるものに於ても該實在の質の方面に於ては唯心論、一元論なり。今此内につき究竟的事物の數を一箇なりとするもの、即ち唯心的一元論に關して記するところあるべし。

一神論の如きにして唯心論なるは唯心的一元論なり。

萬有理性論（汎理論）は曰く、究竟的實在は理性なり、萬有は此理性の顯現なりと。而して理性は精神的のものなり。萬有理性論者の最も著名なるものはヘーゲルなり。

萬有意志論（汎意論）は曰く、究竟的實在は意志なり、萬有は意志の顯現なりと。而して意志は精神的のものなり。萬有意志論者中最も世に知られたるものは獨逸のショーペンハウエルなり。

萬有精神論は曰く、究竟的實在は精神なり、萬有は此精神の顯現なりと。獨逸のハルトマンは該論者の一人なり。ハルトマンの此見解はヘーゲルの說とショーペンハウエルのそれとを總合せるものなり。彼思へらく。究竟的實在は理性にも非ず、意志にも非ず、意志と觀念（理性）との結合、統一せる精神なりと。英國ラシュドー

ールの如きも萬有精神論者中に屬すといふべし。萬有精神論は日本語にて又萬有精靈論、汎靈論と言はる。（萬物は心を有すとの說も邦語にて萬有精神論若しくは汎心論と言はるゝこと既記の如し。是れ西洋の語に基づけるものなるが、萬有有心なりとの說は邦語としては萬有有心論、萬物有心論などの語却りて穩當にては非ざるか。萬物、萬有は心を有するものなりと言へば心も心を有するものなりなど見るべきが如き語弊なきに非ざるが、萬物の有心なることを萬有精神論若しくは汎心論などいへば西洋語と共に、此語弊よりも大なる語弊あるが如く思はる。）

二、二元論。

二元論に絕對的二元論（究竟的二元論）と相對的二元論とあり。前者は究竟的實在に二ありとなすもの、後者は究竟的ならざる相對的の根本的實在に二ありとなす

ものなり。朱子等は理と氣との二者を究竟的實在と解する二元論者なり。プラトーンが實體界と生滅界との兩世界を並立せしめ、兩世界を以て互に異なれるものにして又全く分離せる別々の世界なりとせるの點は究竟的二元論なり。(相對的二元論の例は後に擧ぐべし。)

三、多元論。

ライブニッツ謂へらく。究竟的實在は無數の個體なりと。彼は此解釋上、多元論者なり。彼は是等個體を單子(元子)と名づけたり。彼に於ては單子は非延長的、非物質的のもの、力なり。故に彼の多元論は唯物論、唯物的多元論には非ざるなり。彼の單子は精神的のものと解せられ、彼の多元論は唯心的多元論と言はるゝことあり。

(V) 相對的究竟的實在。

現象界に關するカント式の解釋は唯心論と言はるゝことあり。カントは認識の法則、形式が吾人の心内に先天的に存在すとし、現象界は吾人、吾人の心が此先天的法則に從ひて產出するものとせり。現象界に關する斯かる解釋を唯心的のものと見るには相當の理由あることなり。然れどもカントは現象の根源に本體ありとなすが故に彼に於ては現象界に對する右根本的、唯心的解釋は世界の事物に對する絕對的究竟的解釋に非ずして相對的究竟的解釋など言ふべく、彼に於ける唯心論は現象的唯心論、相對的唯心論など言ふべきものなり。

所謂認識の本質に關して言へば、右の如き現象的唯心論は吾人の認識の對象を現象なりとなすの現象論なり、現象を吾人の心意の產出物となすの點に於ては、(現象

を吾人の觀念となすものなるが故に、)觀念論なり。而して實在たる點に關して言へば、斯くの如き觀念論の「觀念」は、(現象界に於ける究竟的事物、究竟的實在とせらるゝものなるが故に、)絶對的の究竟的實在に非ずして相對的究竟的實在なり。

デカルトに於ては物體(物質)と精神とは互に相異なりて何等共通點を有せざる實體とせらるゝが故に彼の此說は二元論と言はる。然れども彼は精神と物體とを究竟的實在とはせず、神の創造にかゝるものとするものなり。故に此二元論は事物の究竟的解釋に非ず、究竟的二元論に非ずして、相對的二元論なり。かくの如くにして唯心論、二元論等恰も世界の事物の究竟的解釋なるが如く、究竟的實在に關する說なるが如く聞ゆるものにして其實、然らざるものあるなり。

結論

一、哲學研究法。

既記の如く斷定、認識には直接斷定、直接認識あり、間接斷定、間接認識あり。斷定力、(認識力)には直接斷定力(認識力)あり、間接斷定力(認識力)あり。間接斷定(力)には推理(力)あり。而して推理力使用の場合にして然る場合と意識せられず、推理なる場合にして然る場合と意識せらるざる場合甚だ多し。例へばカントは現象界を認識するの形式を吾人が先天的に有することを說く。此形式に關するの斷定は推理によりて得られたるものなり。カントは現象界(一般)、本體界(一般)につきて斷定するところあり。此現象界、本體界につきての斷定も推理によりて得られたるものなり。彼は神の存在、靈魂の不滅、意志の自由を信ず。是等信念

は推理によりて得られたるものなり。ヘーゲルは世界の事物が正、反、合の關係にて開展するものなることを言ふ。彼の此斷定も推理によりて得られたるものなり。神の存在の證明と言はるゝものに種々あり。是等も推理なり。數理上の普遍的知識も推理によりて得らるゝものなり。かくて哲學上の斷定は總て推理によるものなるべけれども其然ることの認識せられざるが爲めに（哲學的事項上の）直觀など言はるゝこと稀ならざるものなるべし。而して哲學上の斷定には事實に適合せざる場合即ち誤謬なる場合少からずと雖も、吾人人類より見ては蓋然性もしくは或然性より以上の確實性を有せずと思惟せらるゝものにして事實に適合する場合即ち（眞の）認識なる場合も甚だ多きものなるべし。即ち人は直接間接の斷定力を利用して哲學上の事項を（或範圍内に於ては）正しく推理し得る如き事情の下に立てるものと見るべきなるべし。

哲學研究の方法にして神秘的など言はれ得べくんば他種の事項の研究法も同じく神秘的と言はれ得べく、前者に於ても、要するに直接斷定力、間接斷定力を利用し批判的態度を以て對象に對するの外なきものなり。

二、哲學的宗教。

哲學によらずしても宗教は信ぜらるべし。又哲學は必しも宗教を目的とするものに非ず。されど哲學者は自ら一種の宗教を得べく、哲學研究者は勞せずして宗教に入るを得べけん。而して哲學より宗教に向ふに於て其道行き、其到達境必しも同一ならず。殊に或宗教、或宗派に既に捕はれ居る人が哲學を研究するに於ても其宗教的に得るところは自ら己が捕はれ居る宗教、宗派の色彩を帶ぶるの傾向あるは已ひを得ざるものならんが、一般に哲學といへば、哲學は既成の宗教、宗派とは恩怨なく

從つて其立場は宗教宗派に對しては中立的のものと言ふを得べし。故に公平なる態度を以て哲學を研究すれば其宗教的に到達するところは割合に中立的なるを得べきものなるべし。

然らば哲學は宗教的に如何なることを教へんとするものなるか。

如實の世界に在り、如實の事情の下に立てる人類に於て、萬事意に任せんことを望むは過分のことなり。諺に言はずや。樂は苦の種、苦は樂の種。盛者必衰。人間萬事塞翁が馬と。歌に曰く、思ふこと一つ叶へば又二つ三つ四つ五つ六けしの世や。人の生命をして無限ならしめんと欲するも得らるべきに非ず。「何せんに玉の臺を磨きけん野邊こそつひの宿りなりけれ。」野邊の宿り、避け得べきものに非ざるなり。「末つひに海となるべき大河もしばし木の葉の下くゞるなり。」如何に大河となり、海となるものも、しばしは木の葉の下をくゞるが世の常なり。喜あり、悲あり、苦

あり、樂あり、光明的方面あり、暗黑的方面あるが人生なり。

斯くの如きの斷定、豈に哲學によりてのみ得られん。然れども斯くの如き事項を超越して觀ずると超越せずして觀ずるとの間には大なる逕庭あることを忘る可らず。哲學は世界、人生に對して超越すべきことを教ふるものなり。

菅桐南が行脚の詩に曰く。君不レ見古昔驍將漢涅漢爾。懸軍直馳八千里。振動羅馬十五城。歸來國亡壯士死。又不レ見輓近英雄那波列翁。席捲歐洲一如疾風。覇圖半就霜蹄蹶。自落蠻烟瘴霧中。咆哮自憑蓋世氣。末路難レ求着レ跟地。秋風原頭白骨堆。日暮行人幾掬淚。寧如單衣赤脚行乞レ餐。一鉢之中寄レ生安。千山萬水重重綠。孤筇度盡乾坤寛。一夜投二高閣一逢二飛雨一。夢見蛟龍爭二糞土一。信レ眉一笑問二蛟龍一。爲レ誰辛苦爲レ誰怒。行脚心しも可ならず。人には勞役の必要あり。事に沒頭しては糞土を爭はざる可らざることもあるべし。されど蛟龍の糞土を爭ふを見て微笑を堪ふること亦

素より不可なきなり。

「深草の元政坊は死なれけり我身ながらも悲しかりけり。」「あめつちの清き中より生れ來てもとの古巣にかへるなりけり。」「莊子の妻死す。惠子之を弔す。莊子則ち方に箕踞し盆を鼓して歌ふ。惠子曰く。人と居て子を長じ、身を老え、死して哭せず、亦足れり。又盆を鼓して歌ふ。亦甚だしからずや。莊子曰く。然らず。是れ其始て死するや、我獨り何ぞ能く槃然たること無からんや。其始を察するに、本、生なし、徒に生なきのみに非ざるなり。本、形なし。徒に形なきのみに非ざるなり。本、氣なし。芒笏の間に雜り、變じて氣あり。氣變じて形あり。形變じて生あり。今又變じて死に之く。是れ相與に春秋冬夏四時の行を爲すなり。人且つ偃然として巨室に寢ぬ。而して我、噭噭然として隨つて之を哭す。自ら以て命に通ぜずとなす。故に止むるなり。」莊子の此哲學的見解の正しきと然らざるとに論なく、又斯く盆を鼓して

歌ふことの當を得たると否とを問はず、彼が死に對するの態度上、參考となすべきものなくんばあらざるなり。

世界、人生を超越することをのみ務むれば絶對的に仙人と化し了るに至るものなるが、哲學眼は絶對的仙人を以て最も望ましきものとは見ざるなり。哲學は吾人が世界、人生に沒頭し、世界人生に捕はるべきものなることをも教ふるものなり。是れ公平なる中立的なる哲學の態度上自らなることなり。かくて哲學的宗教即ち哲學教は現世沒頭主義と現世超越主義とを包容するものなり。

善に通常級、比較級、最上級あり。通常級の善は惡の反對、唯善なることなり。比較級の善は一層善なり、より善きことなり。最上級の善は最上の善なり。但し此三種の善にも各々異なる程度のものあり。通常級の善にても其程度の極度に高きものは至高善、最高善、理想善、最上善なり。一層善の關係も之に同じ。三個以上の

善(善惡的事項)の内にて最も勝れたるは其善たるの程度の如何に拘はらず、其場合の最上善なり。理想善は最も高き程度の最上善なり。而して最上善といへば理想善を意味するを普通とす。程度の最も高き最上善と區別すれば、それより低き程度の最上善は之を比較的最上善、相對的最上善など言ふを得べく、日常の場合の最上善ならば日常的最上善など言ふを得べけん。吾人は惡なる事項にも逢着す。善なる事項にも逢着す。一層善なる事項にも逢着す。相對的最上善、日常的最上善にも逢着す。而して惡を爲さずして善を爲すべく、比較さるべき善ある場合には其一層高き善、最も高き善を選びて之を行ふべきこと勿論なり。而して一層善(を行ふ)の主義、より善きを選ぶの方針も人生上其効果著しきものあり。過を改めて善に遷るも、より善きことを爲すものと見るを得。遲きは爲さゞるに優るといふ諺に從ふも、より善き(を爲す)主義に適合するものなり。

右は道德的事項に關して言へるものなれども、道德的事項と言はれざる事項につきても右の規範は適用せらる。一般に向上發展の方針、努力の方針、改良に改良を加ふること等は生活上の規範となさるべきものなり。

かくの如くにして規範とすべきものを規範とし、樂しむべきことは樂しみ、苦しむべきことは苦しみ、此世、世界、人生に捕はれずして捕はれ、捕はれて捕はれず、俗人にして仙人、仙人にして俗人たらんことは哲學的宗教の吾人に教ふるところなり。かくて此世を樂しみ、天を樂しみつつ努力奮鬪するの方針を得ることは公平なる哲學研究者に於て困難なることには非ざるべし。

哲學汎論 終

索引

ア

アキレスと龜の競走　八四
味　一五〇
壓迫の下に於ける行動　二〇四
惡の大小　二〇六

イ

一般哲學　一
——の定義　二
——の分類　一〇
一重意識　六三
一致　八九
一般的實在論　三一〇
一元論　三二五、三二九
唯物的一元論　三二八
無差別的一元論　三三三
活動的一元論　三三三
不可知的一元論　三三五
唯心的一元論　三三七
一神論　三二九
一體兩面論　三三四
意識的斷定　六一、六七
意志　一八八
意志の必然と自由　一九三
意志は瓦心によりて決せらる　二〇七
因果的關係　九七
音、光等の因果的關係　一五三

因果美　二三九、二四二
所謂思考の原理　一〇一
色　一四八
引力の作用は精神作用　一七二

ウ

運動と靜止の調和　一二七

エ

エーテルの假說　一二五
エネルギー　一五五
熱はエネルギー　一五六
エネルギーと言ひ得べき對象　一五六
光、色、音もエネルギー　一五七
エーテルの波動、引力等もエネルギー　一五八
厭世　二六八
厭世觀　二六九
低き程度の審判たる厭世觀　二七〇

オ

音、音響　一四三

カ

價値論　一一
價値上の認識力　四八
價値的斷定　六〇
價値的現象　一八七
價値的學問　二九二
間接斷定　四九
間接認識　四九
間接認識力　四九
間接推理　五二
必然推理　五二

蓋然推理　五二
或然推理　五三
演繹推理　五四
歸納推理　五五
間接動機　一九一
感覺　三一
——は直接斷定　三三
感覺力　三三
感覺斷定　三三
感情的の人　二一六
感情美　二四四
蓋然認識　六〇
學問の種類　二八四
學問の種類の表　二八九、二九〇、二九一

キ

客觀　二一
機械的審判　四六
機械的能力　一五九
極限分子　一二四
集りて有機物の體となり又無機物の體となる　一八二
極限分子は無機物にして有機物　一七五
究竟的自我　一三五
究竟的自我の不滅　二六四
身體より獨立せる究竟的自我の存在　二六一
人の死後に於ける究竟的自我　二五九
究竟的實在　三二五
一元論　三二五、三二九
二元論　三二五
多元論　三二五
唯物論　三二五、三二六
唯心論　三二五、三三六
非唯物論　三二六、三二九

氣質氣分の影響　二七三
規範的科學　二九二
擬人的神教　三三〇

ク

懐疑的態度　七
絶對的懐疑說　八
相對的懐疑說　八
關係的斷定　三三
關係と統一　三四
關係の種類　八八
類似的關係　八八
總和的關係　九六
因果的關係　九七
第四種關係　九八
關係上の直接間接意識　一〇〇
空間知覺　三五
關係的空間知覺　三六
非關係的空間知覺　三七
空間時間知覺以外の外的知覺　三七
空間　一〇七、三二〇
——の存在　一〇七
——の直接間接認識　一〇八
空間時間の小なる極限の場合　一一七
空間的現象　一二〇、一二三
同時伴生の空間的事項と靈間的事項との間には輕重の關係なし　二六〇
空間的事項と靈間的事項との平行　一五三
空間的事項と靈間的事項との結合せる現象　一六〇
完全眞心　一九九
觀念美　二四四
觀念論　三〇九、三四二
活動的一元論　三三三
外的知覺　三四

外界　三四
外圍　一〇七
現象界の外圍　二五二
本體界の——　一一五
外圍中第三者の存在

ケ

契合　八九
結果美　二四一
形式美　二四四
經驗論　二九六
相對的經驗論　三〇〇
經驗論及非經驗論餘論　三〇六
經驗的實在論　三一三
結論　三四三
原因美　二三九
現象界　一〇七
——の外圍　一〇七
現象
事實的現象　一二〇
價値的現象　八七
空間的現象　二〇
靈間的現象　一二八
物質的現象　一二〇
精神的現象　一二八
現象論　一二、三〇九、三四一
現象の內容　一一八
現象學　二八四
現象內容の學　二八四
現象の內容及外圍の學　二八八
現象及本體學　二八九
現象の理由　二五一、二六五
現象的唯心論　三四一
現實的良心　一九九

現世浚頭主義　三四九
現世超越主義　三四九

コ

好惡と優劣　四四
心
自我が有する一の心　一三一
心は靈間内存在　一三二
心の意義一二　一三六
國家、會社の如きには自我なし　一八四
悟性　三〇三

サ

差異　九〇
差別原理　九一
在天の靈　二六四

シ

主觀　二二
主要目的　一九〇
主要意志　一九〇
思考の原理說　一〇一
三原理說　一〇一
四原理說　一〇一
二原理說　一〇一
思考の原理を事物の原理と言ひ得べき場合　二九
審判　四一
——の正否　四二
——の受動、能動、他律、自律、必然、自由　四四
審判斷定　四一
——は純粹感情　四一
審判斷定の二種類　四六
情意的審判　四六

知的審判　四六
審美力　二二九
眞の認識　六〇
眞と美　二四七
質點　一二六
植物　一六五
種子　一六七
志向　一九〇
手段　一九〇
手段的目的　一九〇
手段的意志　一九〇
信神教　三三〇
自然齊一律　九六
自然的實在論　三一一
自然神教　三三〇
自我(自己)　一三二、一六三
自我の存在　一二、一三二
自己は意識す　一三
自己の存在に關する直接間接認識　一四
通俗的自我　一三二
究竟的自我　一三五
一の自我　一三五
自我の統一　一三八
自我の不統一　一三九
自我の分裂　一四〇
自我は靈間内に在り　一四一
地球の如きには自我なし　一八二
地球の如きに於ける一種の自我　一八三
國家、會社の如きには自我なし　一八四
本體界に於ける自我の存在　二六二
本體たる自我　二六二
本體的自我　二五八、二六三
本體的自我の不滅　二六三
自我の道德的能力　一九六

自我非自我の合一　一七五
自由意志　一九三
事實論　一一
事實的斷定　六〇
事實的現象　一二〇
事實的學問　二九二
事實的科學　二九二
情意的哲學　一二
情的斷定　三八
情が斷定者　三九
情意が斷定者　三九
情意的斷定　三九、四八
情的斷定の對象　四〇
情意的直接斷定　三八
——も知覺　四七
情意的知覺　四八
情意的推理　五六

時間　一〇七、三二〇
——の存在　一一〇
——の小なる極限の場合　一一七
時間知覺　三六
關係的時間知覺　三六
非關係的——　三七
時間空間知覺以外の外的知覺　三七
純粹感情　四一
準精神的現象　一四一
準精神作用　一四一、一五六、一七五
人格　一三七
自我の意識の統一たる人格　一三八
究竟的自我の統一たる人格　一三八
人格の變換　一三八
二重人格　一三九
人格の分裂　一四〇
人格の高下　二一六

人格の尊嚴　二一八
——の證明　二二一
人格神教　三三〇
人類以下の動物　一六三
人道は自律的　二一七
人道は他律的　二一七
人道の自律他律　二一七
人生觀　二六七
人生の價値　二六七
重量保存の法則　一六九
實在論　三〇八、三一〇
一般的實在論　三一〇
批判的——　三一一
非批判的——　三一一
朴素的——　三一一
自然的——　三一一
唯理的——　三一一
經驗的——　三一三
非實在論　三一四

ス

推理　五〇
推理力　五一
數學　七六
數理の認識は間接認識　七六
數學に於ける矛盾　七七
——の調和　八四

セ

性質　八七、一四二
非關係的の性質　八八
關係的の性質　八八
精神的現象(精神作用)　一二八
事實なり　一二八

靈間内存在　一二八
一の精神的能力（一の心）の作用　一三一
精神作用の要素的狀態　一二九
精神作用は自我に屬する狀態　一三四
精神作用にも機械的の點あり　一七二
程度の差ある精神作用　一七三
精神的事項と物質的事項との結合せる現象　一六〇
正邪利害と善惡　二二三
世界の本體　二五四、二五六
——は靈間内に在り　二五四
世界觀人生觀　二六七
氣質氣分の影響　二七三
世界人生の價値　二六七
公平なる解釋、審判　二七五
世界人生に對する高き程度の審判　二七七
世界人生の目的　二七八
全部の部分としての目的　二八〇
自己目的　二八〇
全部としての目的　二八一
世界、人生の内存的及外存的目的　二八二
先天的直覺說　三〇一
先天的形式說　三〇三
生得觀念說（天賦觀念說）　三〇五
絕對的懷疑說　八
絕對的自我論　三三一
絕對的二元論　三三九
善惡　一九四、一八七
——の斷定は事實　一八七
善惡的事項に對する審判の必然と自由　一九二
善惡の階段　一九三
善惡審判の對象　一九四
善惡の等級等　一九六
善惡標準　二〇一
善惡の時代標準等

善惡標準の高下　二〇二
同一人に於ける種々なる善惡標準　二一一
善惡と正邪利害　二二三
正邪　二二三
善惡　二二四
利害　二二五
善の高下　二〇六
善の理想　二〇九
善の究竟的理想　二〇九
善の相對的理想　二〇九
善の理想の見方　二一四、二一五
善と美　二一四七

ソ

相對的懷疑說　三〇〇
相對的經驗論　三〇〇
相對的二元論　三三九
相對的究竟的實在　三四一
想起　四九
想起力　五〇
存在　七三
存在物　一〇六
存在物の狀態の種類中、高き階段のもの　七五
總和的關係　九六
總和美　二三七
壯美　二三二

タ

多元論　三二五、三四〇
唯物的多元論　三二八、三四〇
唯心的多元論　三四〇
胎兒　一六五
斷定　六
——の態度

——の三態度　六
獨斷的態度　六
懷疑的態度　七
批判的態度　八
折衷的態度　一〇
斷定と認識　七
——と判斷　一二
——に於ける自律他律の契合　二七
——の誤謬　六九
斷定哲學　一二、一九
斷定對象哲學　一二、一九
斷定獨存　一六
斷定、認識　二一
——の性質　三一
——の種類　二二
——の主、客　二二
——の自律　二二
——の他律　二五
——の法則、形式　二四
——の對象　七三、三一〇
斷定力認識力　三一、二九五
——等の語　五七
第四種關係　九八
第四種關係美　二四二
第二空間　一一五

チ

緒論　一
知覺　三四
內的知覺　三四、三四
外的知覺　三四
知覺力　四八
知的知覺　四八
知的審判　四六

知的斷定　四八
知的哲學　一一
知、情、意の受動、能動　四五
地球の如きには自我なし　一八二
地球の如きに於ける一種の自我　一八三
直接斷定　三一
——力　三一、三三
直接認識力　三一、三三
直接推理　五一
直接動機　一九一
秩序等の必要　二二二
超越神教　三三〇
超然神教　三三〇
超越的沒頭的態度　二七六

ツ

通俗的自我　一三二

チ

哲學　一
一般哲學　一
特殊哲學　一
哲學の定義　一、二
哲學の一般的定義　一
一般哲學の定義　二
哲學上の諸說　二九五
哲學研究法　三四三
哲學的宗教　三四五
哲學教　三四九
程度上斷定の分類　五七
天を樂しむ　二六八
デカルトの二元論　三四二

ト

特殊哲學　一
特殊科學と哲學との關係　三
統一　三四
獨斷的態度　六
獨斷說　七
同一　八九
同一原理　九一
動機　一八八
直接動機　一九一
間接動機　一九一
道德心　一九六

ナ

內的知覺　三四
內界　三四
內存的二元論　三三五
內在的二元論　三三五

ニ

認識　七
素然認識　六〇
或然認識　六〇
非認識　六〇
眞の認識　六〇
認識と斷定　七
——は有限　三〇
認識力は有限　三〇
認識の原理は事物を有りの儘に意識する原理　二八
——は事物の原理　二八
認識の起源　二九五
——の本質　三〇九
認識哲學　一九
認識對象哲學　一九
認識、斷定

——の性質　二一
——の種類　三一
——の主、客　二二
——の自律　二二
——の他律　二五
——の形式、法則　二四
——の對象　七三、三一〇
認識力、斷定力　三一、二九五
——等の語　五七
二重意識　六四
——は一層統一的意識　六七
二重人格　一三九
二元論　三二五、三三九
絕對的二元論　三三九
相對的二元論　三三九
デカルトの二元論　三四二
臭　一五〇

ネ

熱　一五〇
熱はエネルギー　一五六

ノ

能力を有するは物質の狀態　一五九

ハ

判斷と斷定　一二
半意識的斷定　六八
範疇　三一五
汎神論　三三〇
汎心論　三三五
汎理論　三三八
汎意論　三三八
汎靈論　三三九

萬有引力　一七〇
萬有神教　三三〇
萬有在神教　三三一
萬有有心論　三三五
萬有精神論　三三八、三三五
萬有理性論　三三八
萬有意志論　三三八
萬有精靈論　三三九

ヒ

批判的態度　八
批判說　九
批判的實在論　三一一
非批判的實在論　三一一
非實在論　三一四
非唯物論　三一五、三一九
非經驗論　三〇一
非分化的審判　二四九
非唯我獨存　一七
非斷定獨存　一七
非關係的(個物的)斷定　三三
非認識　六〇
人　一三二
人の自我の統一　一三八
人の目的　二一六
光　一四八
品性　二一一
表面美　二三四
通眞美　二三六
美醜　二二八
美醜上の情的審判と知的審判　二二八
美　二三二
美の種類　二三二
美麗

壯美　二三二
表面美　二三四
裏面美　二三四、二三六
通眞美　二三六
類似美　二三六
總和美　二三七
因果美　二三九、二四二
原因美　二三九
結果美　二四一
第四種關係美　二四二
歷史美　二四三
形式美　二四四
觀念美　二四四
感情美　二四四
理想美　二四七
美の標準の階段　二四六
美の高下　二四六
美と善、眞　二四七
美的審判の受動、能動　二三一
美的審判の正否　二四六
美感は無利害的に非ず　二三〇
美感の種類　二三二、二三四
美麗及壯美　二三二

フ

不純粹感情　四一
不容間位原理說　九四
不完全良心　一九九
不可知的一元論　三三五
普遍的平行論　一八五、三三五
分量　七五
分子力　一七〇
分子の振動　一七五
——と準精神作用との平行　一八〇